



始



特233
193



福德商會主人述

小資
成功
本
法

スピード金儲け秘訣



東京 木村書店發行

金儲けの教訓

▼目的の爲めに手段を選まざるは邪道

▼大に儲け而して有効に之を活用せよ

金儲けの秘訣は平素の心掛けにある

金儲けには如何なる心掛けが必要であるかと云ふに、常に正しい道を歩むと云ふ事にある。これまでの成功者の経歴を見るに、目的のために手段を選まぬ人が頗る多い。或は要路の官吏と結託して利権を得たとか或るものは罐詰に石を入れたとか、或る者は品物を誤間化して巨利を占めたとか、数え上げると際限がないが、斯くの如きは邪道である。彼等と云へども恐らく自ら省みたならば、良心に恥づる處多いに違ひない、斯くの如きは不義にして富めるもので、吾等の斷じてとざる處である。

富貴は人の共に欲する處、貧乏は人の共に厭ふ處である。而して如何に知識があつても資本がなければ事業は發達せぬ。従つて國家も富み榮えない。富國強兵の實を擧げるにしても産業の發達が最も肝要である。其の産業を興隆せしむるには資本が必要であるから、各人が富まんとするのは、間接には國を富ます事となる、此の見地よりして吾等は金儲けを大いに高唱し讚美する。金儲けをするには不斷の努力と、辛苦に堪へ忍ぶ覺悟と、機を見るに敏なるを必要とする。斯くてあらゆる機會に於て、是を巧みに捕へ、正々堂々と儲くべきである。平素に於て此の用意がなければ、例へ好運が目の前にぶら下つても、是れを逸してしまふ。歐洲大戰當時續出した成金は今や大抵其の影をひそめたが、これは彼等が調子に乗り過ぎて、引き締める事を閑却した爲めである。何人も機を得て儲け初めたならば、其の半面に於ては仕事を引き締める用意を怠つてはならない。今日晴天でも明日大暴風雨が襲來せぬとも限らぬ。其の時になつて狼狽しても追ひつかない、平素に於て何時暴風雨が襲來しても、びくともしない丈の準備を心掛く可きである。尙ほ世間では戰時成金を目するに、濡手て栗の掴み取りをした如く考へて居るが、彼等と雖も

其の多くは此の好運を掴むまでには幾多の苦闘を経て居る。決して偶然に好運にぶつかつてボロイ儲けをしたのではない。

無理は破綻の基であると知れ

金儲けをするには、進取の氣象が必要である。何事をなすにも、周到なる調査と研究を重ねた上、確實なる見込みが立つた上は、必ず是れを成就する覺悟を以て、熱心に其の事に従ふべきである。斯くせば、成功は期せずして至るであらう。引き込み思案の人は、徒らに其の結果のみを思ひわづらひ、優柔不斷の態度を脱れない。是れが爲め折角の好機を失ふ事が多い、斯んな人間に限つて、人を恨み世を憤り、一生を不遇に終るものが多い。又事業には必ず確たる計劃を必要とする。計劃なくして進む事は、恰も羅針盤なくして航海するに等しい、何時暗礁に乗り上ぐるかわからぬ。且つ計画的に進む事は、萬一中途に蹉跌する事あるも、再起して進む事が出来るが、無計劃にて進む時は、一度の失敗が終生の破綻となる恐れがある。且つ行き當りばつた

主義は平素の準備に於て幾多の缺くる處あるをまぬがれないから、失敗を招ぎ易い、心すべきである。

尙ほ注意す可きは、功を急ぐなと云ふ事である。一氣に儲けんとせば、何うしても無理が伴ふ無理は破綻の基である。焦れば焦る程隙だらけになるから、僅かの事にも蹉跌を來す、されば金儲けを志す人々は、功を急がず、秩序的に、階段的に進む様心掛く可きである。斯くすれば一面に於ては基礎が固くなり、一面に於ては賢實に成功の域に進み、遂には目的を達するに至るであらう。

有効に活用せざれ何等の價値なし

金を儲けた上は、是れを有効に活用しなければならぬ。是れを活用せずして死蔵するは、守銭奴たるの譏りを免れない。吾等は親しく米國の地を踏んだ事はないが、彼の地の大富豪は、如何にして金を儲けんかと云ふ事よりは、儲けた金を如何にして最も有効に活用せんかと云ふ事に

就いて苦心してると云ふ。斯くの如き心掛けは大に學ぶ可きであると思ふ。

日本の大富豪と云へば何人も先づ三井、三菱に指を屈する。世界大富豪の十指に數へらるゝ程であるから、日本の富豪と云ふよりも、世界的富豪と云ふが至當であらう。處て三井にしても、三菱にしても、相當の仕事はして居る。慈善事業に對しても少なからぬ金を投じ、學術界にも相當の醜金をして居る。然しながら三井の主人公にして、三菱の御大岩崎にして、果して社會的活動をして居るか、吾等の知る範圍では、彼等は無爲徒食何のなす處もない。例へば三井の主人公は堂々たる大邸宅を構へ、多數の召し使ひを置き、贅澤三昧に生活して居るが、而かも遊んで居て、毎年何百萬と云ふ大金が轉り込んで行くのである。吾等は決して三井の公共事業に對する金額の多少を云々するものではないが、斯う云ふ態度で満足さる可き者であらうか。

故澁澤子爵に學ぶ所あれ

今は故人となられたが、吾輩の最も尊敬する澁澤老子爵の財産は何百萬あるか知らぬが、大富

六
豪でない事実は事實だ。見方に依つては富豪と云ふ事は出来ないかも知れない。三井、三菱等に比すれば、恐らく何十分の一か或はもつとそれより少いかも知れぬ。それであるにも拘らず公共事業には卒先して金を出す計りてなく、更に進んで盡力される。子爵の如きこそは眞に金を有効に活用する生きた手本と云へやう。見渡した處、金を活用する事、老子爵の如きを他に見る事が出来ぬ、他の富豪は子爵を以て範とす可きである。

老子爵は金儲けを主義とされなかつた。凡ての事柄に對し、常に國家的觀念に基いて終始一貫された。明治初年以來子爵の如く多數の會社に關係された人はなからう。然し子爵は金儲けの爲めではなかつた、國家の産業發達の目的以外に何物もない。されば子爵にして大に儲けんと欲すれば、或は三井、三菱に比肩する大富豪たる事も可能であつたかも知れぬが、貨殖を心掛けず、國家社會に對する貢獻を旨とされたる點に於て、子爵の偉人さがある。三井、三菱の主人公に子爵の如き心掛けがあつたならば、恐らく彼等の徳望は現在に數十倍するであらう、が單に大富豪の主人公として知らるゝに止まり、それ以外に社會的存在の價値を認められぬのは、彼等の爲めに惜む處である。

大に儲けんとする人々よ。儲ける事以外に、是れを有効に活用する事を忘れてはならぬ。百圓の金も是れを活用すれば千金萬金の働きをなし、千金萬金も死藏しては一錢にも劣る。此の點について特に例を海外に求むる迄もなく、日本の國寶たる吾等が尊敬する故澁澤老子爵に學ぶ可きである。

大に金を儲けんぞす人々に

▼はしがきに代へて！

▼一句子金の金儲け魂

◎ 金が物を言ふ世の中だ。

世界第一の利巧者が、たとひドンナにエラ相なことを吐かしたところで、それは、一文の値打もないダボラにすぎない。

◎ 金さへあれば、ドンナ馬鹿でもエラク見え、ドンナにエライ奴でも文なしでは一生頭の上りつこがない。

金は溜めるものでなく、儲けるものだ。

チビチビ金を溜め込むやうなケチ臭い根性を持つてゐる奴が、どうして天下の大金持となれるものか。

◎ 一と儲けて見やう——これは貧乏より金持となる合言葉である。とりわけ裸一貫で金儲けの第一線に立たなければならぬ人間にとつて、まさにそのいのちであり、たましひてなければならぬ。

◎ 濡手で粟のつかみどりて、成金を夢ゆる時代は、とつくの昔にすぎ去つた。今日は『一つまた一つ』と、自分の働で富の力を築きあげて行く時だ。

◎ これからの人間は、新しいアタマを元手として、限りなく金を生み出す工夫をこらさねばなら

ぬ。金儲けのコツやリ方を知るよりも智慧と機会とて金を儲けなければならぬ。

一〇

◎
むづかしい理窟はやめ、金儲けは口の先ではトテモ出来ない藝當だ。頭から手へ、手から足へ行く、實際の働きのほかに仕方がない。

◎
世界の大金持として、天下に名を知られたカーネギーや、ロックフェラーは、アメリカの大貧乏人であつた。日本の三井、岩崎もその通りであつた。故に、人間は誰も皆、頭と腕の働き次第で、天下の大金持となることか出来るのだ。フォードは僅か十年で世界第一の金持となつたではないか。

◎
イクラ世間が不景気でも、金儲けはスグ眼の前にゴロゴロころがらつてゐる。それを機械に見つけて高く飛び上る人間と、ムザムザ踏みにぢられて、ヘタバル奴とのちがひが金持となり、貧乏

となる、わかれ目である。

◎
早いのはなしは、アタマの工夫一つで、活動寫眞のプログラムを種に、大儲けをした利巧者があり、また在來の辻占に、ちよつとの新味を加へた不思議なカードを賣つて、素的に儲けた果報ものが居る。

◎
アテにならぬことをアテにしてゐては、五十になつても、百になつても、一文だつて儲りつこない。コレがいゝと思つたらスグやつて見ることだ。グズグズしてゐては、お金の方から、おさらばをしてしまふ。

長者番附を見て涎を流したり、自動車から泥をハネ返されて怒つたりする奴は、餘程野暮な奴だ。そんなヒマがあつたら先づ自から一文でも多く儲けることを工夫するがいゝ。そして一日も早く自動車を威勢よく乗りまはして見ることだ。

◎ 大きな圖體して棚からボタ餅のおつこちて來るのをまつやうなヤクザものは、よろしく舌でも嚙んで往生するにかぎる。

金儲けは夢物語ではない。眼の前にブラ下つてゐる現實の問題だ。これを解決する生きた鍵はコノスピート金儲け法の一巻である。コノ鍵を握るものは、自由に富の寶庫を開くことが出来る。

◎

さア、こゝまで言つた……もう一言だ。タツターページよんだゞけても、百萬金に値ひするピントと、チャンスとをつかみ出して金儲けの種を見つけてることが出来るに相違ない。

目次

第一篇 貧乏より金持への近道

一 貧乏程辛い病がない……………	二
二 一にも金二にも金三にも金……………	三
三 貧乏すれば人間が馬鹿になる……………	四
四 貧乏は金持となる第一歩……………	六
五 貧乏を苦にする者は一生貧乏……………	八
六 貧乏切抜けの新工夫……………	九
七 金儲けのつけ目どころ……………	二
八 金儲けの工夫と機會……………	三

九 金儲けはゴロく／＼轉つてゐる.....二五

一〇 活動のプログラムで大儲け.....二七

一一 田舎の親父が大儲けした話.....二〇

一二 新聞の三行廣告で儲けた男の實話.....二三

一三 無一文から一躍金持となつた男.....二六

第二篇 金持となる資格と實力

一 本當の金持とは?.....三二

二 一生食ふに困らぬ生活安定法.....三三

三 一生間誤つかぬ収入の道.....三四

四 一金三千萬圓也を握つた人.....三五

五 利害にビク／＼せぬ生活.....三六

六 一生安心して暮らせる方法.....三九

第三篇 小資本廻轉早わかり

一 百圓の百廻轉は一萬圓.....四一

二 廻轉率の早い程利益が多い.....四三

三 資本の廻轉は金儲けの早道.....四四

四 アタマで金を生み出す時代.....四七

五 アタマの廻轉は資本の廻轉に優る.....四九

第四篇 安月給取より獨立生活へ

一 先づ自から獨立の第一線へ.....五一

二 安月給取では金持となる見込なし.....五三

三 恐るべき月給取病患者の群れ.....五五

四 いはゆるサラリーマンの悲哀.....五七

四

第五篇 獨力で資本を調達する最良方法

一 一文なしでは商賣が出来ぬ……………七〇

二 先づ最初の百圓を得るには……………七一

三 百や二百の資本は朝飯前のこと……………七二

四 資本増殖の便法として……………七三

五 五百圓の資本を四千六百五十六圓にするには……………七六

六 資本は活かして働かせるもの……………七八

七 慘め極まる月給取り生活の末路……………七九

八 獨立生活は男兒の快業……………八〇

九 大に儲け大に使ふのが金儲の本望……………八一

十 安月給取は貧乏生活の前提……………八二

十一 獨立生活は金持となる第一歩……………八三

五

第六篇 巧に資本を調達する方法

一 萬と纏つた金より百圓の調達が困難……………八六

二 高利資金の融通は商賣の大敵……………八七

三 資金調達機關としての金融講……………八八

四 面白い組織の無盡講……………八九

五 年賦償還法による資金調達の便法……………九〇

六 資金調達の新しい試み……………九二

七 貧乏人の活用すべき金融機關……………九六

第七篇 銀行の利用と金の借り方

一	資本の缺乏は何によつて補ふか	100
二	信用に百萬金の値打あり	101
三	銀行の利用には先づこの準備が肝要	103
四	銀行利用は商賣繁昌の基	105
五	ブローカー銀行の利用法	106
六	低利資金の運用法	108
七	銀行から金を借りる人の爲に	110
八	銀行から金を借りる資格	111
九	腕や頭の人よりも人格の人	113
一〇	商賣の内容を確認する説明の力	114
一一	銀行の利用にも宣傳が必要	115

第八篇 金を借りて信用を得る呼吸

一	商賣の爲の借金は大にすべし	110
二	上手に金を借りるコツ	113
三	巧に借金を返済するヤリ方	113
四	金を借りる時の注意	114
五	借用證のかき方注意	116
六	預ケ金取引の心得一斑	117

第九篇 これから見込ある儲かる商賣

一	活版印刷業	118
二	名刺印刷専門店	118
三	印刷物注文勧誘業	118
四	新聞雑誌關係新商賣	118
五	廣告新聞の發行	118

六	アドライター	一五
七	月遅れ雑誌販賣	一六
八	筆耕屋	一七

第十篇 大利益ある新流行の儲かる商賣

一	繪葉書店	一八
二	ばんぢゆう販賣	一七
三	パン屋	一八
四	ゴム靴屋	一九
五	時計蓄音機修繕業	二〇
六	有利なタイヤ修繕業	二〇
七	無線電話機商(ラデオ)	二〇
八	自動車運轉手になる迄	二六

第十一篇 一風變つた新しい儲かる商賣

一	訪問販賣	二六
二	生命保険の縁故募集	二七
三	パンと焼芋の移動販賣	二五
四	贈答品仲介業	二六
五	種苗商と花店	二四
六	月賦販賣のヤリ方	二五
七	年收一萬弗の婦人販賣員	二六

第十二篇 無資本で出来る儲かる商賣

一	ブローカー	二七
二	廣告外交員注文取の秘訣	二八
三	年收七萬圓の外交員	二八

第一篇 貧乏より金持への近道

一 貧乏程辛い病はない

二

貧乏！

貧乏は實に、人生の一大罪惡である。誘惑を藏すること深く艱難困苦を藏することまた深いものだ。余は諸君が眞剣にこれを避けることを懲懲する——とジョンソンは言つた。

彼はふたゝびいふ。

たゞ貧乏したばかりで、通常人のうくる極めてありふれた樂しみまでも私は失つてしまつたのだ。悲しい誤解、いな、したいことを成し得なかつた許りに、慘酷な離散の憂き目をみた……。貧窮のドン底につき落されたことのない人は、本當に貧乏といふものが、人生のあらゆる光明面を暗黒ならしめ、そして人生のあらゆる希望を失ふに至らしめる事實を、そしてその事實が如何に慘酷であるかといふ事實を——筆者もまたさうした事實に直面して貧乏は人生の一大罪惡であることを體驗したのである。

四百四病の中で、貧乏辛い病がない。との言葉は端的に貧乏之苦の眞底をさらけ出して見せる言葉である。筆者はこの言葉の前に、慄然として、佇立する。そして、かぎりなき恐怖と不安とを痛感せざるゐられない。

一一 一にも金！二にも金！三にも金！

フランスの大英雄大奈翁が「國家の功業を大成するには一にも金！二にも金！三にも金である……」と喝破し一切の文句や理窟を抜きにして、彼は作戦計畫を直ぐ實行に移して、世界全土を席勝したではないか。

故ウキルソン氏が生前米國大統領時代、近親者にひそかに語つて曰く「大米國の政治の中心地はホワイトハウスではなくして實にウォール街である」と長歎して、黄金の勢の偉大さにはまさらの如く驚いたのであつたといふ。

今日世界を支配するすべての力は、科學の力でもなければ、また思想の力でもなく、宗教の力

三

でもなく、實に黄金の偉力がこれを支配する最大のオーソリテイたることを誰か否定し得やう。要するに世界の文化は、黄金の文化で、物質文明の新資本時代の大波潮が、滔々として東洋の一孤島たる我が國に打よせつゝある。

精神も肉體も、黄金の光なくして美はしい光彩を發揮することが出来ない。

武士は食はねど高揚枝——と言つた武士道全盛の時代は、もう過去に於ける一場の夢に化してしまつたのである。

今日——脊に腹は代へられぬ時代となり、セチ辛い浮世の荒波は、多くの人々の生活を脅威し生存力は全く枯涸せんとしてゐる——社會苦、人間苦、生活苦——の諸世相は、貧乏苦そのもの、現はれでなくて何であらう。

貧乏は唯單なる人生の罪惡たるばかりではなく、恐ろしい人生の憂患である。

三 貧乏すれば人間が馬鹿になる

貧すれば鈍する——この一句は貧乏苦の底をあらはにはだけて見せた呪はしい貧乏苦の表現である。腹が空いては、手も足も出ないのである。どんなにエライ人間でも天才でも貧乏してはもうおしまひである。

その昔、俳人一茶が、加賀の殿様に招かれ垢面破衣、すこしもひるまず、一席の俳談をこゝろみた上、その俳談の極意をきかれるや、夕值素餐の徒に、大自然の風月を友とするものゝ心境がわかるものかと淡呵を切つて俳人の恬淡無慾さを見せ、さうして立派な衣類一かさねと金一封を頂いて御殿様の御前を下がるや、首尾や如何にと待ちかねる多くの門弟を尻目にかけてまゝ、庵室の裏手のゴミ溜へフイと拜領ものを投げこんでしまつた。

これはくとおどろく門弟をふたゝび横目にニラんで

「何んのその百萬石は笹の露」

と一句をのこしてそこをサツサツと立去つたといふ俳味豊かな一挿話が傳へられてゐるが、それは時代——比較的悠長な生活の流に棹し得た時代のたはむれであつて、今日かうした大悟徹底の俳味化した生活に即し得ることは、到底見られないのである。

六
少くとも當節に於ては、さうしたノンキな藝術的氣分に没頭することはゆるさない時代となつた。どんな立派な一流の大藝術家でも、自分の趣味を中心とした繪や文學を書いてゐてはその日から糊口に窮するのである。それ程世の中が詩を作るより田を作ることの緊要な時代となつたのである。

一代の文豪夏目漱石をして「情に棹させば流される」と咏嘆せしめたではないか。

四 貧乏は金持となる第一歩

恒産がなければ恒心がない——衣食足つて禮節を知る——と説いた支那の大碩學孔子の言葉の如し、金がないと、人間の心はとかくさもしくなる——水に渴したものが、樹蔭の清泉に垂涎する如く、久しく貧乏してゐるものは、黄金の光に浴すると、物にうへたる者が食をむさほるが如き、ものみにくさをあらはすものである。

實に恒産なきものは恒心なく、衣食足らざるものは禮節を缺くものである。分を知り足ること

を辨へる消極的の處世哲學は、ある程度——イヤむしる貧乏の全部を承認する弱者の哲學である。貧乏人として生きることが願はず、最上級の金持として生きんことを希望するところに人生の向上あり進歩あり發展と飛躍とがある。

貧乏は幻滅で金持は現實である。金持は何等のリクツなしに金持である。そして貧乏から救はれ幸福に充されたる生活に局面することが出来る。

貧乏人は到底、人生の幸福を意味するものではない。人生と生活の眞の目的は金持として生きることになるそして、貧乏は金持たるべき一ツの暗い道程にすぎないのである。

暗い貧乏生活の下に明い光や新しい望みを見出して榮ある輝やかしい新しい天地に進出して行くところに人生無限の妙味があるではないか。

人間の内的生活が豊かにみだされてこそ眞にめぐまれたる生存の意義と人生の價値が存在するのである。

五 貧乏を苦にする者は一生貧乏

八

いたづらに不平を言つたり愚痴を添したりして自暴自棄の生活に入ることとは金持になる道ではなし。

由來、悲憤慷慨は人間を愚劣ならしむる。又いたづらに感情の涙を催して身の不遇をかこつことも賢明なる人間のとらぬ所である。要するに、人間は貧乏に忍従する生活をもつて歩一歩富の寶庫に向つて進んで行かなくてはならないものである。

貧乏から一躍大成金となることはむづかしい。そこで人間はネバリ氣の強い底力をもつて、貧乏道から金持道へと一步一步漸進的歩調をもつてすゝんで行かなければならぬ、貧乏してゐるとかく勇氣が挫け、屈托し易く、したがつて富の福音をきくことからだん／＼と遠くはなれて行かなければならないのである。

つまり貧乏苦のために、すべてが破壊されてしまふのである。だからどんな智能のはたらきを

有してゐる優秀精銳な頭腦の所有者であつても、長い間貧乏すれば、自然、愚鈍な人間となりあはれ社會の落伍者となり世の敗殘者となつて、何等の計畫もなし得ない不具鈍能者となる況してや何等の實行おやである。

それ程、貧乏といふものが人間の智力能力體力を低劣ならしむるものである。たゞ貧乏なるが故に、天壽を完うし得ずして終る人すらある。

貧乏のために貧乏をくりかへして、一生光明輝く地平線に浮き上り得ぬ人々のあはれなることよ。

六 貧乏切抜けの新工夫

しからば、どうして貧乏をキリヌケ金持線に據頭して金持としての幸福生活に入るべきか。努力！これである。貧乏に追はれ生活に追はれながらも一生懸命精進努力すれば、貧乏を追ひ越すことが出来る。稼ぐに追ひつく貧乏なしの例言を存するゆゑである。

九

しかし、貧乏に追ひ越されてしまつたら最後容易にこれを抜くことが出来なくなる。貧乏しながらも何事か有望なる計畫と發明とを樹てこれを實行するならば、貧乏の中にありて光明一盞、さらに、瓦石の玉よりダイヤモンドの光彩を見るが如く、容易に貧乏を突破して光明界に躍進することが出来るのである。

米國のフォード氏にしろ死んだ獨逸のステンネス氏にしろ最初から巨富を抱いてこの世に生れ出たものではない。三井、岩崎、安田、大倉などもさうである。無一文の素寒貧から精々辛苦して、今日の富を致したものである。

世間の人がよく「運が悪い」とか「運がない」とかいふ。しかし、運などは、自然に努力次第でどうにでもなるものである。故に貧乏はその人の一生涯についてまはる絶對的宿命ではないのである。

「どうでもかうでも金持になつて見せる……」といふ熱烈な決心一つで金持たり得ることが出来るが、しかし、盲目滅法の努力精進では結局勞して效なき結果を見るのである。

いゝ計畫すなはちシツカリした金儲の工夫をこらさねばならないのである。唯、儲けただけ

では何んにもならない。いゝ計畫を樹て、これを立派に實行して、金を生み出す工夫をこらすの必要である。

しかし、金儲けの工夫といふものはナカ／＼に容易の業ではない。みんな金儲けの工夫が巧ければ、世の中に貧乏人が一人もなくなり、みんな金持となれる譯である。

「これなら確に儲かる……」と見込のついた仕事なり商賣なりを完全に立派にやり通す人が、榮ある眞の成功者となるのである。

つまり有利にして而も有望なる金儲計畫を命がけで立て、命がけで實行すること、業半ばにして中止すれば折角の工夫も失敗に終るのである。

七 金儲けのつけ目ごころ

あれが儲かるからあれがいゝといふ風におつちよこちよいに何んでも彼んでも嚙りかけなければ承知の出来ない人がある。かうした人間はほんとの大金儲も出来ず仕事も駄目である。この種

の人間はその一生涯を通じて貧乏につきまとはれるのである。

ねらひをさだめ——確かな照準から目標を定めて、一弾を打出す玉はあたる。貧乏と金持との分れ道はこの一点にある。貧乏してゐる……とかく人間はあせる。何とかして一儲けして見たいとあせるから結局一物も得ない——といふのは肝腎の目標が動搖して、ねらひが定まらないからである。

人生の目的がウント儲けてウント費ふことであるならば、先づウント頭腦をよくしてウントやることである。

無限に新しい精力のみなざる頭腦を益に能動的にはたらかして、益々富を得んことに努力するならば、必ずや、金持として立派な生活をつゞけて行くことが出来るであらう。

貧乏してゐるでは、勇ましい戦をつゞける根氣も精力も勇氣もなくなる。それは不味い物を食ひ生活苦に追はれアクセクして生活に疲れ結局何ものもめぐまれない。

精根まつたくつきはて、智慧も工夫も出なくなり人間がだん／＼馬鹿になりボケてしまふ。それと反對に、富めば富む程、いゝ金儲けの工夫や計畫が浮んで頭腦いよ／＼明敏となりいつも緊

張的な生氣激刺たる生活が出来、身體の調子もよく長壽も出来るのである。極言すれば、黄金をはなれて人生の權威も生活の誇りも見出し得ないのである。拜金宗と言はれ守銭奴と稱せられてもわれ／＼は黄金を必要とする。そして「富の力」を永遠に確保して行くところにはゆる幸福なる生涯を送ることが出来るのである。

八 金儲けの工夫と機會

むづかしい理窟はやめにして、現代はアタマ一つで、働く時代である。アタマで新しい工夫を凝らして金を生み出す時代である。人間並のことをやつてゐるは所詮、一並以上にすぐれたることをやり得ない。人間はアタマの中で計畫を樹て、これを手で現實化することにしなくてはならない。

百萬の富も、滾々としてつきぬアタマの工夫計畫の現はれである。

資本の力よりも智慧の力がはるかに強くして大きい。われ／＼は自分のアタマを唯一の資本と

して、無限に富を致すために努力しなければならぬ。

文化時代に於ける最も新しい商賣をさがし出して、ウント金を儲くべきである。

世間多くの人は、不景氣を嘆じ、商賣の不振を慨してゐる——しかし金儲けの工夫と機會が、いつでもわれわれの眼の前にブラさがつてゐる。如何に不景氣の時代でも、セチ辛い世の中でも金儲けの機會と工夫は無限にある。

筆者は讀者に對して、性質や目的のよくない不正な金儲法を傳授しようとするのではないが、世の中に少しの工夫とちよいとした工夫によつて、いくらでも金儲けの機會と工夫がなり立つといふ一實例として、最近の新聞に報ぜられたニュースをもつて、これを證したいと思ふ。

某女流作家の賞金何千圓かの小説當選の結果が國民新聞に發表された直ぐ、その翌日、餘り綺麗でもない一青年が、其女流作家を訪問して、金百圓を強請した——といふ事實にすぎないのであるが、随分世の中にはいろ／＼な商賣があるものだ、この智慧をいゝ方面にむけて、機敏に機會を捉へ巧妙なる工夫をもつてすれば、かうしたいはゆる金儲けといふものがザラにあり至るところに／＼／＼轉つてゐると言はざるを得ない。

九 金儲けは／＼／＼と轉つてゐる

少しの工夫と一寸とした機會によつて、金儲けは極めて容易である。世の中の人々がたゞ儲けたいの一天張りで新工夫をこらし新機會を捉へやうとする。

これでは千萬年経つても、金儲けが出来ない譯である。結局は、自分の頭腦の使ひ方にある。巧みな工夫によつて早く機會を捉へる金儲けは益々可能的となつて来る。

ある氣の利いた貧乏學生がゐた。なんとかして、無資本で一つ金を儲けて見たい。しかし一攫千金的な大それた、ことをやるのではなく、ホンの學資の一部若干の生活費をうればよいと考へてゐた。

考へた結果、東京市内の各活動寫眞館で、毎週二回乃至三回の映畫の變り目毎に、木戸口で觀客にくれてゐるプログラムを方々の活動寫眞館から、だゞで貰ひあつめ、二十枚乃至三十枚といふ風にひとまとめにして、それをパラフィン袋に入れ、嚴封して活動寫眞プログラム——學

生聯盟東京キネマ週報社と紫のゴム印を押し一袋金二十錢として、本屋に依託して賣り出して見た。

ところが、ファンの人氣に投げ、忽ちにして賣切れの盛況を呈し、素手で何百圓かの金儲けが出来たのである。

ソコで、味を占めた學生君こんどは、事業を擴張し、少し大仕掛けな方法を案出工夫して、ウソト騙けて見やうと志し、従来、活動寫眞館からプログラムを貰ひあつめることをやめて、直接印刷所へ交渉し事情を開陳し兩方の諒解を得ポンの實費で、一枚イクラといふ風にキメ、同一のプログラムを百枚二百枚にまとめて、手に入れ、さらにそれを統一綜合して、例のパラフィンの袋に納め、市内目貫の場所、活動寫眞館の近くにある本屋に依託して大にうりひろめることにしたのである。

ところが矢張り工合がよく、忽ち賣切の盛況で、たうとう五十錢の大値上を斷行し、二千部から毎週賣りつくしここに大丈夫といふ確信をにぎつたのである。

今日では、賣上利率が相當にあり結構商賣として成立つてゐるといふ。世の中は誠に不思議な

もので、ホンのちよいとした工夫と計畫が忽ち金儲けの材料となるのである。

貧乏學生がちよつとしたアタマをひねくつて鼻紙にも値ひせぬプログラムをよせあつめて十枚二十枚と各館のプログラムをまとめパラフィンの袋に入れて賣ることによつて、死んだプログラムは忽ち生きて、羽が生え飛ぶ様にうれて行つた。

この一小例をもつて見ても、金儲けはどんなに容易であるか——工夫と機會とにそのよろしきを得れば、どんな金儲けでも出来ることを最も事證的にこれを裏書してゐるではないか。

一〇 活動プログラムで大儲け話

一 學生の新しい金儲けの新工夫は、アタマで濡手で粟の一人儲けをしたのである、一枚のプログラムですら左様に、役に立つ——立派な金儲けの材料としての資格がある。

賢明なる讀者諸君！

先づ自から苦心工夫して、諸君の手近かな場所からいゝ金儲けの材料とそして機會とをつかみ出

して、一つ大當に當てゝ見ては如何？

決して御遠慮には及ばない——筆者はこの種の新しい金儲に關するやり方及びコツについて、卑近なる二三の實例を引證して讀者諸君の御參考に供したい思ふ。

これによつて、何かのヒントを得大に儲けられて巨億の富を積む金持の準備をして貰ひたい。先づ第一の御參考として、プログラムの袋の中に入れてあつた印刷物を御目にかけて、如何に如才なき商略をもつてやつてゐるかを明にして見たい。

拜啓陳者日々焼くが如き災熱の候と相成り申候處御貴ファン諸氏には日夜如何御暮し遊され哉乍略儀右紙上を以て暑中御伺申上候
扱て從來發行のプログラム儀ファン諸氏の多大なる御援助御同情に依り今やキネマ界の不振にも拘らず獨り當社の隆盛は偏にファン諸賢の深甚なる御力添に依る賜物の外無之厚く御禮申上候今夏の如き各學校の休暇と同時に當社に於ても一ヶ月休刊の心算に有之候處反つてプロ研究に熱心なる皆様の御希望多く年に月に各館のプログラム又蓄積せられる向きも多數有之由承り當社に休刊は反

つてキネマ研究御諸賢の妨と存じ斯に意を一變從前通り奮闘仕る可く然して萬事に不便多き事務所も表記に移し前社名を改め一意専心益々プロ配付以つて御諸賢研究御用途の爲に務む可く候間當社プロ御使用の上益々御研究有り然して當社御引立の程偏に希願上奉候 敬白

學生聯盟 東京キネマ週報社

主任 中村文吉

顧問 池田比敏

定價改正

每週金曜日 發行 定價 一週間分 金三十錢(送料二錢)
每週土曜日 發行 定價 四週間分 金一圓二十錢(送料共)

(送金はすべて小爲替の事)

右の通り定價改正仕り毎週二十館以上封入致し臨時増加週間と雖も料金一切値上せず

五十錢を投じてこのプログラムを見るいはゆるファンは活動を見る上に於て、非常に参考となり、ドコの館では何を寫してゐるかといふことも分るし、また、實際活動を見なくとも、映畫の梗概を知り心を慰め得る利益があるのみならず、プログラムによつて、キネマ界の近況消息を知ることが出来、下手な活動雜誌など買ふよりこの方によるのが餘程賢明な方法である。ソコを見込んだ學生君のアタマは金儲けのアタマであると言はなければならぬ。

一一 田舎親父の金儲け振り

話は少し古いけれども、筆者が友人からきいた儲け話の二三を左に紹介して見よう。地方の人は東京は金が掃き捨てる程もあると思つて居る。東京の人に聞えて見るとそんなことはないと言ふ。けれども矢張り地方人の見るやうに、東京は金が澤山落ちてゐる處だと、つくづく感じた。

千葉の或る町から六十ばかりの爺が、東京に買物に出て來た。その爺が電車で人に話をしてるのを聞くと斯うだ「東京の人は物が高い」と言つて愚痴るが、私なんち東京へは一月に三度や四度斯うして通つてるが、少しもさうは思ひませぬ。東京程金儲のし易い處はありませんよ。私などは今日は上野の松坂屋の安賣に少しばかり買ひに來たのですが、千葉に歸つて、今日買った物を近所中賣り歩けば、四割やそこらは儲けがあります。三越の木綿デーの時にも買ひに來ましたが、あの時は金があつても、少ししか買へないので儲けが少なかつたが、何しろ斯うやつて、安賣の呉服店を歩き廻つて、安いと思ふ奴を片端から買つて行き、田舎で賣れば誰でも買ひ手がありますから、こんな商賣は我々のやうな老人には、至極適したものですな」と蓋し此の老人を呼んで、バーゲン・ハンター（安賣漁り）と言ふのであらう。

一二 新聞の三行廣告で儲けた實話

同じ東京に住んで居る人間でも、中々金儲うけの上手な者もある。或る家が空いたので、その家主が貸家札を貼ると、其の日に借り手があつた。借り手は家賃や敷金を聞くと、直ぐ内金を

置き、貸家札の上に赤で、約東済と書き入れて立ち去つた。それから後二三日しても、借り手は見えないが、二三日の間といふものは、切りなしに色々の人が家を見に来る。餘り不思議なので見に来た者に聞いて見ると斯うだ。「新聞に貸家の廣告があつたので、手紙で問ひ合すと直ぐ廣告主がやつて来て、貸家は何處其處であるから、一度見に行つて呉れ、家賃は幾ら、敷金は幾らと言つて、此の鍵を渡して呉れたので、實は今日見に来つたのです。」と言ふ。住宅難に突け込んで斯う言ふことをして、口錢を儲けてゐる人間がある。

又避寒地として沼津或は熱海方面の別荘地に行く、斯う言ふのである。東京から上記の避寒地に赴いて、別荘を探し、見付かると規約に従つて家賃並びに敷金を拂つて、東京に引返し、東京の新聞に貸別荘の廣告をやつたり或は周旋屋に依頼して借り手を探し、自分が借りた家賃や敷金よりも二割、三割も高く貸付ける。そして其の借り手は後の借り手に斯う言ふのである。「實は自分は東京で暮らしたので、此の別荘は暫時お貸しするのであるから、つまり貴方には私の留守をお預けするのですから其のお積りで、心易く居て下さい。家賃は東京の何處其處にお送附下されば、引返に受取證を差し上げますから」と言つて自分の住所を教へて、東京に戻つて終ふ。

別荘の持主は少しもさような事實を知らぬのである。金儲けは難かしい。僕は何日もこんなことを、自分で自分に問ふて居る。果して金儲けは難かしいか。

もう一つの實例を御紹介する事としよう、但し其遺り口が非常に辛辣なものであるから決して此れを範に取られない様、豫め御断りをして置き度いと思ふ。まあ世の中には、此様な際どい橋を渡る人間も有ると云ふ事を御承知置下されば其れで良いのである。

此處に一人の男が有つた。本名は暫らく預つて假りの名を石田義雄として置く、石田は常に最新流行の洋服を着て、小綺麗な事務室にハイカラなテーブルやチェアアを並らべて、區町の精査と云ふ仕事をやつて居た。(現在區町精査所と云ふものが東京市内に二つ三つあるけれども其人々を指すもので無い事を明言して置く)

彼れは先づ新聞廣告に依つて月賦洋服を造つて居る店が三軒有る事を朝日新聞の廣告に掲載される「よろづ案内」欄で發見した。

此三軒に向つて合服の見本を持つて来いと同時にハガキを出した。合服の注文を爲たのは時期が丁度合服に向はふとする時であつたからで、此合服には何んの種も仕掛も無いのである。罷り

出た洋服屋は三軒とも六ヶ月拂ひである事を説明した。無論此三軒の洋服屋は同時に同じ室で面會したのでは無い。時出を別々にして、三軒の洋服屋共自分のみが御用命を辱なくして居るものと思ひ込ましたのであつた。

三着の洋服が殆んど日を同じうして出来て来た。代金の第一回分を拂ふから取りに來いと云ふ様に家人に命じて、自分は日中外出して留守の間に洋服を置いて行かせたのであつた。

珍藝當は此れから始まる、彼れは三着の内最も恰好の良いものを着用して他の二着を質屋に持込んだ。質屋から借りた額は、新調であるだけに三軒の洋服屋へ其第一回を支拂つて尙、可なり餘裕が有つた。彼れは此れを稱して小使錢付の注文洋服と呼んで居た。

次ぎに彼れは、十二ヶ月拂ひの家具を賣る丸二とか丸武とか云ふ月賦専門の家を知つて居たので、此家具屋から事務用テーブルと椅子とを買取つた。但し此買入れは少々洋服の場合より手強かつた。二人の保證人を立て毎月約束の日迄に其月分を支拂ふと云ふ證書の外に萬一延滞の節は差押へられても不苦と云ふ一札を納れさせられた。彼れは黙々として月賦屋の云ふが儘に其通りにした。第一回の支拂は例に依つて夜か明朝取りに來いと命じた。

眞に電光石火の働らきで、彼れは此事務テーブルを賣渡證書の形式即ち賣權擔保として高利貸でない男から非常な低利で金を借り入れた。

借り入れ金の一部を以て月賦屋に第一回を支拂ひ、其殘金を新聞廣告費に當てた。

東京の三大新聞に早速會計係及集金係募集の廣告を出し、月給六十圓を與へると明言し但し信認金三百圓を要すと附加へた。

金の三百や五百は涙金として退職の際に貰つたが、此れで將來の生計を立てる事は不可能だが如何にして職業を得べきかと氣を揉んで居る際に、此廣告を見たとしたら、餌に飢えた大出水後の魚が釣針に罹り易い如く、數多い失業者や、田舎で何か東京に甘い仕事は無いかと、毎日朝の十時頃から二時頃迄の間に配達される東京新聞や大阪の新聞を目を皿の様にして居る内に、こゝうした廣告を発見すれば親や兄に頼んで、信認金を貰つて應募する者が可なり多いのである。

彼れは適當の人物として應募者の中から三人を選らんだ。此三人の適任者と云ふのは果して手腕家を意味するかどうかは言明の限りで無いと彼れは笑つて居た。

三人から預かつた九百圓の信認金を持つて、直ちにテーブル椅子の賣權擔保で借り入れた金を

支拂つて仕舞つた。これは月賦屋に證書を入れて有る上に重ねて此れを擔保として借入金を其儘としたのでは刑法に觸れる恐れがあるから早速整理して仕舞つたのであつた。

次に彼れが爲した仕事は、外交員の募集で此れも亦新聞廣告に依つた事は勿論で、此廣告代は信認金を流用したのである。

集まつた外交員に對して、彼れは次の様に話した。「仕事と云ふのは外交員諸君が各自に出動する方面を相互に打合せて、甲は何區の何町から何町にかけての一區劃を擔任する、乙は甲に接隣した一區劃を引受ると云ふ具合に其擔當を割當て後、出動するので、そして受持區域に行つたならば、軒別に訪問して御町内の案内圖を製作して人通の頻繁な所に掲示しようと思ふ此れは他の土地から此土地へ訪ねて來たものに對して大變便利なものであるから是非賛成して頂き度い、二圓なり三圓なりを御出し下されば其代り御宅の名前を地圖の中に明記して其所在を一層明にするから御宅を訪ねて來られる御來客に對しても非常に便利であると思ふ」と云へば大抵の家は出して呉れる。(此れは金儲け研究を目的とした記事では無いから此の利益精算は省略する、ことにする)

一區劃分が纏まつたならば、多少測量の心得の有る安月給の土木技手を雇入れて略測の上略圖を作り上げ、町名番地を記入して且つ出金者の姓名を其居所に相當する體に書き込んで掲載圖面を完成せしめる。(何百分の一の圖面にするか、又板にペンキを以て書くか、金屬板に黒く表らばすかは、其人の考へに依つて決する所であるが、此れは金額の上に大した差が無いから何れでも良い)

此圖面の製作代は月末支拂ひであるから、直ちに支拂ふ必要がなく、圖面を掲載すれば前述の人から掲載料が取れるから、此れを集金して然る後に、一切の支拂ひを済ませば其れで宜ろしいのである。

斯くして儲けた金で順次に月賦の家具代や洋服代を支拂つて尙、月々莫大の金を残して、とうとう先に質入れした洋服も受け出して今では堂々たる邸宅に納まつて仕舞つた。

洋服やテーブルの立派な奴を必要とする事は金が無いだけに一層重大な役目を務めた譯である何んと諸君際どい遣り繰り法も有つたものではありませんか。

もし、此場合計畫が外れたとしたらばどうなつたであらうか。洋服屋は第一回が支拂つて有る

から民事を引起す愛は有つても刑事とは無らないが、家具の場合と、信認金が大部分問題となつて来る。彼れは非常に意志と自信とに強い男で、斷じて失敗する恐れは無いと見て猛進したのであるが、萬一外れた場合には、負ければ賊軍として降服する覺悟を有して居つたのである。彼れは最後に、凡そ世の中の事、總べて、勝てば官軍負ければ賊ならざるは無しさと大笑して居つた。

一三 無一文から天下の金持となつた男

また左の實例は、筆者が近々知つた事實であるが、ある男が非常に困つて、何か無資本で出来る金儲けがないだらうかと苦心研究の結果、漸く工夫案出したのが在來の辻うらに對して新味を加へたものであつたのである。

窮すれば通つて、理學研究會といふ一看板を出して、不思議なカード（十枚一組五錢二十枚一組十錢）と名稱をつけて、自から神樂坂、銀座等の夜店に出で路上販賣をやつて見たのである。

ところが、物見高い東京のこととて、忽ち評判となり、賣れる賣れる、一晚十圓二十圓の賣上を見たのである。

そして、そのカードたるや極めて簡單なもので、半紙八ツ切のもので、右半分の餘白に自分の希望や見込をを書いて、火にかざすと左の餘白に辻うらの文句が現はれて来るのである。一枚のカードに僕の將來はどうでせう……とかいて、火にかざして見ると——ノチノチヨロシイ——などといふ文字がハツキリあぶり出されて来るのである。ホンのちよつとしたもので如何にも小兒だましのやうなものであるが、巧みに人間の弱點をつき一枚のカードに、好奇と興味とユーモアを加味してゐるので、客の心をひきつけるに十分である。

不思議なカード——は實に不思議な位人氣に投じこの男は無一文で、非常に儲けたのである。金儲けの種明かしは先づこれ位にして置き、以下項をあらためて新しい金儲の實際に於けるコツやヤリ方について説いて見たいと思ふ。本書によつて讀者諸君が如何に大儲けしたからとて筆者は斷じて利益の配當を要求せぬことを明に御斷して置く。

であるから、ウンと頭を働かして名案を考へ今日の無一文も決して落膽することはない。一躍

三〇
して生活の安定どころか人の羨む文化生活を享受することの出来ることは、然まで困難なことで
はないのである。

第二篇 金持となる資格と實力

一 本當の金持とは？

『商賣をやつてゐるときも、商賣をやめた時も、常に同じ生活率度をもつて進み得る準備のある人。』

即ち一定収入のある職業からはなれたあとに於ても終始一貫の安定生活をつゞけて行くことの出来る人が、本當の意味に於ける金持である——金持の資格を有する人である。

右の一節は、アメリカの評論雑誌として數百萬の讀者を有する最も信用ある雑誌に發表された金持の定義である。』

これ丈の文句で判断すれば少々分りかねる點がないでもないが察するところ、失敗しても成功しても何時も同じ生活——人間としての暮しの立つ人——を本當の意味に於ける金持である一定不動の生活基礎に立脚する人こそ、眞の金持としての資格と實力とを有するのであるといふ意味であらう。

言葉を代へて云へば、儲けたからとて餘り有頂天にならず損したからとて落膽せず言はゞ成功失敗の圏外に超然として立つ底の内外の準備、すなはち、いつも同じ生活態度をとることの出来る人といふことであらう。

これを一層簡明に説明すれば「餘りビク／＼せず堂々たる人間として生きる」ことになるであらう。

二 一生食ふに困らぬ生活安定法

然し、精神的に觀れば、イクラ物質的に失敗しても精神的に超然としてゐれば、何も精神生活まで變更する必要がないといふ意味にもとれるのである。

この言葉を極窮すれば、餘り貧乏せず食ふに困るやうな事のない生活の用意——平静不亂の生活を送り得る丈の準備をしろといふものらしく考へられるのである。

損したからとて生活を縮少し、儲けたからとて生活を膨脹せしむることはよろしくない、能率

があつてもなくともいつも變らぬ同じ生活状態^{せいくわつじょうたい}でやれ。それをやり得る人間^{じんげん}が即ち眞實^{しんじつ}に金持^{きもち}そのものであるといふのであらう。

かうなつて見ると、結局^{けつぎよく}、恒産恒心^{こうさんこうしん}の問題^{もんだい}も程度^{ていど}の問題^{もんだい}であつて、あへて過大^{くわだい}の恒産^{こうさん}必ずしも過大^{くわだい}な恒心^{こうしん}となるものではないといふことに思ひ至るのである。

恒産^{こうさん}が少しなれば恒心^{こうしん}がなくなる——ではこの言^{げん}にそむくことになる。要するに恒産^{こうさん}と恒心^{こうしん}に相共通^{あひきょうつう}するところに眞の金持^{まのきもち}たる資格^{しきかく}が有るのである。

他の一面^{かひのいめん}から考察^{こうさつ}すれば、人間の生活^{じんげんのせいくわつ}には常に動搖^{どうごう}がある。すなはち、景氣^{けいき}や人氣^{じんぎ}さては一身^{いしん}上の都合^{じやうごふ}からいづどんな變化^{へんわ}がないとも限らない。

そこで、いつの場合^{ばいばい}も困らない丈^{だけ}の準備^{じゆんび}が必要^{ひつやう}である。勿論^{もちろん}、物質的^{ぶつしつてき}の用意^{ようい}を十分に、一方^{いほう}の収入^{しゅうにふ}がとまつた場合は、他の方面^{かひのほうめん}から収入^{しゅうにふ}を得ることにするのである。

三 一 生間誤つかぬ収入の道

収入^{しゅうにふ}をもとむる口^{くち}を一口^{いこう}に限定^{げんてい}せず二つにも、三つにもして置くのである。

月給取り^{げつぎよとり}が内職^{ないしやく}や副業^{ふくぎよ}によつて、生活^{せいくわつ}の資^しをより多く殖^{ふか}し、またその基礎^{きそ}を安定^{あんてい}にする工夫^{くふう}をするといふやうな行き方^{いきかた}である。

そして、収入^{しゅうにふ}の平均率^{へいきんりつすう}を保つ、不安動搖^{ふあんどうごう}のない經濟生活^{けいざいせいくわつ}の基礎^{きそ}の上に立脚^{りつきゃく}することが必要^{ひつやう}なのである。

眞^{まこと}の金持^{かねもち}といふものは周圍^{しゅうゐ}、環境^{くわんげんじやう}の變化^{へんわ}に支配^{しはい}せらるゝことなく、超然^{てうぜん}獨歩^{どくぽ}、悠々^{いゆうく}として動搖^{どうごう}なき生活^{せいくわつ}に大きな足跡^{あしあと}を印^{いん}して行く足^{あし}である。

これには何^{なん}と言つても、平素^{へいそ}不斷^{ふたん}に於ける物質的^{ぶつしつてき}利殖^{りしやく}運用^{うんぎん}に意^いを致^{いた}し、生活^{せいくわつ}百年^{ひゃくねん}の大計^{たいけい}を樹^たてなければならぬのである。

つまり、儲け口^{もちぐち}を一つでなく二つも三つもこしらへて置かなければならぬのである。そして、眞^{まこと}の金持^{かねもち}としての生活^{せいくわつ}に入る準備^{じゆんび}を整^{ととの}へなければならぬ。

四 金參千萬圓也を握つた人

神戸の戦争成金として一方の旗頭たる榎本謙四郎といふ人のカバンの中には、常に三千万圓からの株券、公債、現金、預金通帳、手形等が唸つてゐるさうだ。

そして、榎本氏はこのカバンを小脇に抱へて東奔西走、ビズネスライフを送つてゐる。たまたま神戸から上京して、日本橋の第二流旅館に泊りこむと、餘り上等でもない例のカバンをほんど部屋の隅つこに投げ出して、天下泰平をキメ込むのだといふ。

ワケを知らぬ人は、誰だつて、薄汚ないカバンの中に大枚参千萬圓からの金が唸つて居やうと氣のつく筈もなく、況してや第二流の旅館、來てゐるから、三千万長者のホテルにはふさはしからぬことである。

例へ泥的の炯眼を以つてするも「コンナけちくさい奴は見込なし」と泥的の方から御免を蒙ること必定である。

朝起ると、水道の水でココソと顔を洗ひ餘り新鮮でもない御香の物か何かでサラサラと御茶漬をかつこみ、例の汚ないカバンを小脇に抱へて外出するといふことである。

寝ても醒めても、シツカリと三千万圓を握り締てる。そして、別に威張りもしなければ大

な顔も見せない。一たびそのカバンを開けば、三千万圓の黄金の光りと唸りとが一時に發するといふのである。

五 利害にビクビクせぬ生活

筆者は、榎本氏のさうした徹底振りに感服せざるを得ない。身荷も黄金界に置く以上、「かうした心がけ」が必要であると思ふ。

そこに、眞の金持としての資格と實力が満ち充ちてゐるではないか。

ヤレ儲けた。損した。ソラ景氣が悪い。イヤ物價が上つたと愚にもつかぬ下らぬことをいふてゐる時間があるならば、先づもつて、榎本氏の「金持振り」に學ぶべきである。

世界かどうならうと、景氣がドウならうと、大地震が來ようとして、要するに三千万圓は依然として三千万圓の價値を有するものであり！。確然たる事實として、榎本氏の掌中に握られてゐる。天下は永久に泰平である。世にこれ以上、心たのもしいことがあるであらうか。

必ずしも三千万圓を必要とせぬ。要は眞の意味に於ける「金持」として、この世に存すれば足る。例へ五千萬圓でも一萬圓でもよろしい。薄汚ないカバンを旅館の隅つこにボンと投げ出して、天下泰平を夢みる程の氣魄をほしい。

カバンそのもの、價値よりも内容の充實である。相貌風彩よりも、人の問題である。頭腦の事である。才腕の力である。

生きた力をしつかりとその掌中に握り占てる程世に強いものがあるであらうか。コレ位世にアチになることがあるであらうか。筆者はせめてかうした心持丈でも持合せたいと念ずる次第である。

商賣繁昌の眞の意味は、ココから出發してココに歸納するらしく思はれるのである。

筆者は二三千萬圓のカバンそのものを徒に貴しとするものではない。唯この徹底味確實味を欲しいものだと言言するのである。

筆者はこの説につけ附へて「金持の定義」を下して見たいと思ふ。

職業からはなれ、明日から困る生活と、例へ今職業からはなれても少しも困らぬ生活とは

恒産の有無によつて決せらるべき問題である。と。

六 一生安心して暮らせる方法

して見れば、人間といふものは、ウンと働いて恒産をつくりあげ、安心して一生を送ることに努力せねばならない。

無駄な精力と費用を極力節減して、ある程度——生活保證の出来る富の力を築きあげなければならぬのである。

はなやかな生活によつて、一時の快をむさほることをやめ、地味な永遠の生命線を辿り進まなければならぬ。

人間は、いつまでも若くして、元氣よく働けるものではない。いゝかけんのところで、生活のユトリをつけなければならぬ。

生活のユトリといふのは、とりも直さず恒産を残すことである。生命の残高に正比例すること

ろの富の残高を保つことである。

物質文明の爛熟時代——黄金萬能主義の今日、金をはなれて、人生の存在がない。然らば、人生一代の恒産として、幾何を要するか——それは勿論、程度の問題であるが、大體に於て人間一代最低限度の恒産として五萬圓か拾萬を要するであらう。

上を見れば切りも限りもないこと、い、かげんのところで、諦めをつけないければならぬ。

無事に安樂に隠居生活の出来る程度に止めるとして、五萬圓の恒産がなければならぬ。

五萬圓を銀行に預け、年五分の金利がつくとして、一年の利息二千五百圓、月に割れば、ざつと二百圓、二百圓で老後の十年を送るといふ風になるのである。

六十七十の老齡に達してからもアクセク、生活の不安に襲はれるといふことは餘り感服すべき事柄ではない。むしろ人生の悲惨といふべきである。一生 涯貧乏線 上に擡頭することの出来ない人程、惨めなものがない。

第三篇 小資本回轉率早わかり

一 百圓の百回轉は一萬圓

小資本にて大に儲けんとするものにとつてこゝに一つ、見のがすべからざる重要な問題があるそれは、筆者がかつて三越呉服店に在勤中、倉知事務が筆者に對してかたつた資本並商品の回轉率に關する解説である——先づ小資本にて大に儲けんとする前に、是非ともこの問題を心得ておかなければならない。何となれば、小資本成功法とは、薄利多賣主義の壓縮化したものであり、薄利多賣は、小さい資本の回轉の速度をより早くする唯一の資金運用の秘訣であるから……

「我國の一般小賣店の純利益——殊に三越の如き百貨商店に在つては、漸く一割五分位の利益であつて、極尠いものになると五分内外である。然るに相當な配當が出來るといふのは。唯、回轉率が多いからである。つまり、ターン・オーバーの速さによるものである。

つまり一ツの資本で年に五回轉すれば、五分宛の利益でも優に二割五分の利益に該當する譯合で、好く讀れるものになると、一ヶ月三回一年を通算して、十八回轉もするので、平均、二分六

の口錢でも三割六分に當る。併しアメリカあたりの商店の如く一割も二割も値下げすることは殆ど不可能である。

現在三越で販賣してゐる商品の中に約七割は生活必需品即ち實用的商品である。これらの商品から二分づゝの口錢を取つてゐるのであるが、幸ひにして二ヶ月に三回轉即ち一年に十八回轉三割六分といふ利率を數字の上に現はしてゐるのである——と。

かくの如く、商品及び資金の回轉率の多いこと速さとを闡明して、最も大膽に卒直に三越の儲け高を明示し公表し、三越は何故繁昌するかの問題に對して最も巧妙に徹底的に解決を與へてゐるのである。

二 回轉率の早い程利益が多い

更に、新しくこゝにくり返していふ。

「二ヶ月に三回轉即ち一ヶ年十八回轉するので、二分の口錢でも三割六分といふ利率を數字化

することが出来るのである。」と。

回轉率——資本の回轉率即ちターン・オーヴーマーといふことは、商品の賣れ行きがよければ、それにしたがつて、資本が急速度に回轉する。必然の結果として利益が薄くとも回轉の速さによつて、利益率がグン／＼進んで行くのである。

年一回の回轉率と比して、年五回乃至十回轉の率度をもつて進めば、たとへ一分宛の口錢を得ても優に一割の口錢に該當することになるのである。

もつとコレを分りやすく説けば、三越の如き大資本を運営する商店を標準とするまでもなく、筆者の貧弱なポケットにある現金百圓を年に一回資本化して一割の利益即ち十圓を利するより年十回轉の資本化の率度をもつて回轉すれば、十割の利益を得、忽ち利率が元金に倍加して筆者のポケットに返つて来るのである。

商店の經營もコノ理窟——この正しい理論からはなれない。資本がイクラ少くとも、回轉率さへ速く多ければ、結局大資本に對抗して高い大きい利益をあけること左程むづかしいことではないのである。

そこで、新しい經濟學の本をよまない人でも商賣人は「資本回轉率の速度」といふことを知つて、徒に大資本を擁しても回轉率が鈍ければ、到底資本の速い回轉率には敵せないのである。讀者諸君！

大資本なきを嘆ずる勿れ！

現在の資本をヨリ迅速に回轉せよ！

然らば、黙つてゐても、その資本はひとりでズン／＼大資本化し、利益はいやが上にも増大するであらう。

大資本がなければ、商賣は思ふやうにやつて行けぬといふことは立派な時代錯誤であり大勢逆行の最も甚しき謬見である。

三 資本の廻轉は金儲けの早道

いくら小さい資本で商賣を始めても、その廻轉の方法よろしきを得るならば、いはゆる資本の

廻轉率の早さによつて、大資本の鈍い廻轉にも優る所の大きな結果を現實し得るであらう。

もし、資本廻轉率といふものがなくなつてしまつたならば、小資本の商賣人は一生小資本商人線上にあり、一生いつまでたつても大資本を抱擁する大商人となることが出来得ないであらう。

世間の人達はよく、資本があればとか、あるひは、資本が豊富であればとコボすけれどもいくら資本ばかり多くあつたとて、それを廻轉せよその運用よろしきを得ざるに於ては一文の資本をも有せざるに如かないのである。資本廻轉の率迅速を缺きその運用方法が悪ければ、到底大なる成功線に擡頭し進出することは出来ないのである。

要するに、經營者のアタマの問題である。腕のはたらきである。新しい時代の商賣人も商賣の繁昌も、アタマから出發してアタマに歸納するのである。

そして、資本が廻轉率に乏しくば、有してゐるところの資本もプラス・マイナス・イコウオル・ゼロとなること朝飯前のことである。何といふ悲惨なそして愚劣なことであらう。商賣人にとつてこれ程馬鹿々々しいことがないのである。

商賣人にとつて、いやしくも何が一番恐ろしいことかと言つても、資本の死蔵、商品の停滯、

現金の停頓程恐ろしいことはないのである。

世の中に何が一番利益が多いからと言つても資本運用の敏速と廻轉率の速度の早いのに叶ふものがないのである。人のアタマさへよければ、金はアタマの中からいくらでも、泉の如く滾々と湧き出て来る。いまアタマの中から無限の富を金を生み出すことあだかも大黒様の打出の小槌に似てゐるのである。

四 アタマで金を生み出す時代

計畫の時代だ。頭腦の活用時代だ。頭のはたらかせ方一つで、貧乏もすれば金持にもなる。計畫——よい工夫——これは巨億の大資本にもまさる無形の大資本である。

何よりも先づ眞先きに、人間個々の腦味噌を一新することである。男兒、資本なきを憂へんやである。人あつての資本、資本あつての人ではない。頭腦あつての資本、計畫あつての資本だ。大に儲けんとして徒にあせるより、先づ如何にして資本を生み出すべきか？ 如何にして少き資

本を大資本化すべきかの緊急の大問題である。さらば、その運轉と廻轉率の速度をより早からしむることである。

それを知らずに、資本が少い、資本が滞る。何んといふ間のヌケたはなしであらう。生きてゐるのか死んでゐるのかワケの分らぬ資本の使ひ方はやめて、先づ頭腦の中から資本を生み出せ！そして、これを巧みに上手に廻轉せよ。

然らば、人生五十年をして必ず富の福音に幸福感を充すことが出来るであらう。記憶せよ！小資本の廻轉運用は、一攫千金を争ふ投機事業に非ざることな。

併して「どうにもならぬ……」といふ生氣のない聲は弱者の叫びで人間はもつと強く生きなければならぬ。それには先づいゝ思ひつきと創案と工夫と計畫を必要とする。讀者諸君の有する頭腦の發明とさうして独自の創見とをもつてせよ！

さうした氣轉の利いた良い思付と、新しい創意のない人は永遠に雄飛活躍することが出来ないのである。

良い思付と新しい工夫とは、あだかも飛行機に於けるプロペラーの如きものである。

五 アタマの廻轉は資本の廻轉にまさる

「資本より腕へ」そして「腕より頭腦へ」の新しい時代が來た、實業界の上層階級では「腕のあるなし」といふことよりも「あの男は頭がいゝ」とか「頭が悪い」とかに目標を置くやうになつて來た。「腕よりも頭」といふが、多くの場合、腕と頭とは殆ど常に一致する。

頭腦のいゝものは、腕もあるのである。頭腦のいゝものは機に臨み變に應じてよりよく活動し得る可能性をヨリ多く持つてゐる。

頭腦資本時代——腕よりも頭への時代が來たのである。

銀座の通りに僅か三尺の間口の雜貨店がある。小さいけれどもなかく繁昌する。あれは恐らく銀座の中に於て一番小さい店構であらうと思はれるのが、店の小さいのに反して、賣上の多いことも利益のあることも恐らく第一等であらう。

また、米國のサンフランシスコに頗る小さなカラー店がある、間口二間位の小さな店であるが

間口四間も五間もある洋品店に對抗して、ヒケをとらない程の大繁昌を見せてゐるといふことである。

「どうしてアナタの方はそんなによく賣れるのか？」と、ある新聞記者が訊ねたところ、

「私の店では仕入れた商品を半月もチツとさせて置かない、必ず半月以内に賣切つて、半月の後には安い商品が補充されてゐるやうにしてゐる。そんなら何故さう早く賣れるかといふと、半月以内に賣れてしまふやうに、安く賣つてゐるのである。資金の廻轉率のよいことばかり考へて、商品の利益率を普通の店の半分位に見てゐると答へたといふことである。

頭でも、廻轉率と同一のことである。頭のはたらきを充分よくすればよくするといふ、頭となるのと同じことで、資本も廻せば廻はすほど利益が上つて來るのである。

頭さへよくはたらかせれば、三尺間口の小店でも、容易に大商店に對抗することが出来るのである。ましてや資本少きを嘆ぜんやである。

第四篇 安月給取より獨立生活へ

一 先づ自から獨立の第一線へ

不景氣のドン底をついて突發した、先年帝都の大震災は、實に前代末聞の一大慘禍であつた。しかし、官民協同して、これが善後の策にそのよろしを得、いまや、新帝都再建のプランがまつたくなり、社會の秩序恢復し、人心安定し、けふ殆ど新帝都を形成したるの觀を呈してゐる。そして、新しい希望と明光とが復興途上にある新帝都を輝やかしく照らしてゐる。しかし、當時に於ては、貧富一如、大資本運營の途まつたく停頓し、小さい資本を動かして、商賣が立派にやつて行かれたのである。

そして、主人も主婦も、また老人も子供も一齊に、食はんがため生きんがために働かなければならなかつたのである。

東京市の田島助役は、悲壯な聲をあげて、——徒に蠢々黙々として、救護配給をうくることをやめ、全市民はことごとく立ちて働け！

あるひは、筋肉労働に、あるひはまた街頭商業に——新生活の第一線に立て！と絶叫をつとけたのである。

あゝ眞に働かざるものは食ふべからず、一國非常の危局にのぞみ、世間體や外聞などを云々してキマリが悪いの耻かしいのと言つてゐる餘裕すらなかつたのである。

獨立自給、新生活建設のために、決死の勇を揮つて戦はなければならなかつたのである。

質屋の主人が牛めし屋となり（何アにかうしてゐれば一日三十圓の商賣が出来る、暮には一族あけて見せる！）と家財は焼かれても生命に別狀なき限りウント働かにや人間として面目が立たない——あわて、田舎に逃げ出者の氣が知れないと慨した話は有名である。

震災後一年餘歳をすぎ、當時の緊張味さになく、人心弛緩し、やうやく輕兆浮華の風が、世間にみなぎつて來たが、咽喉すぐれば熱さを忘るの感に堪えないものがある。

二 安月給取では金持となる見込なし

現代に於ける商業學校出の青年學生の多くは、大學なり専門學校なり出ると、先づ就職口をさがす——銀行・會社・商店——サラリーは？ポウナースは？といふことに、アタマを捻ねくるのである。

かくの如くにして、前途有爲の實業青年は若くして、サラリーマンとなり高々百か二百の給料で、その一生涯を支配されなければならないのである。

やれ赤門出だの三田出だの一橋だの稻門だのと騒いで見たところで、百とまとまつた給料にありつくことは、まことにむづかしい。

三井や三菱などの大會社と雖も、さうした商業學生を、無限に收容し切れないから多くの商業青年の希望する大會社大銀行大商店に皆が皆まで、職を奉ずることは不可能である。

運のよくない連中になると、第二流第三流甚しきは名もなき銀行會社は愚か怪しげなる個人商店に安い月給でかへられることに甘んじなければならぬ今日のありさまである。

それに、財界の不況は、ひいて事業の縮少となりなるべく人手を省く主義、経費を節減する方針をとり、人員の淘汰につぐに冗費の節約が行はれてゐる。

そして、月給は益々底下する、決算期に貰へる賞與金なども次第に率が悪くなつてボンの形式的になつて行く——。

三 現代恐るべき月給取病患者的の群れ

何しろ世の中がセチ辛くなつて來た。イクラ偉くなつて、素晴らしい立志出世をして見たいと思つて、先づ先が一杯につかへてゐる。

後進の道をひらくどころの騒ぎでなく、新しい多くの商業青年は、華々しい前途の希望も抱負も捨て、空しく先進先輩の後を拜し、久しく下積となつて簿書推積裡に打ち果てなければならぬ。

ある有名な實業家が、大ピラに聲言して曰く、「これからは當然幹部社員といふものを必要とせぬ何んでもいゝからツブシの利く人間を使ふことにとめねばならぬ。ソロバンを巧く弾き、文字をキレイにかき帳簿を上手につける新社員がほしいのである」と。この言葉の中には明かに出世

の道が、全く塞がれてゐることを認めざるを得ない。

即ち幹部として働く人は一人も入らない。いはゆる稼の下の力持となつてくれる、下働きの人間でなければ入らない——といふことが暗示されてゐる。

しかるにも拘らず、現時、日本の商業學生の多くは、自から進んで、安月給取りたることに、専心し、一念發起して、何かの新企圖をもつて、獨立計畫を樹てやうとするものがある。

これはまさしく、現代商業青年共通の一大病弊であると思はなくてはならないのである。

學校は處世の法便、即ち安月給取りたる便宜のためであつて、自から進んで男らしい仕事に勇ましく出精せしめようとすることに意を用いてゐない。

誰れも彼れも、みな一樣に、五十圓乃至六十圓さらに下つて四十圓三十圓といふ安月給に甘じて、滔々としてブアサラリマン・ライフの底に没落して行くのである。

彼等は何のために、學校に入つたのか、また安月給取たらんがために大學教育をうけたのか、まつたくその諒解に苦しみなほかつ多くの疑點を思出さざるを得ない。

高等の教育をうけ、態々安月給取りに浮身をやつすならば、何を好んで、多額の學資を費ひ、

東都に遊學する必要があらう。

それならば、むしろ田舎にデツとしてゐて、百姓生活でもしてノンキに暮らした方が餘程、自然味と人間味がある。

四 いはゆるサラリマンの悲哀

學校を卒業すると、一二月間の月給を棒に振つて、新調の背廣服を著し、そして、無理な算段をしたり、不義理な借金をしたりしてまでも、チョツキの紐に金鎖をからませたり、金縁眼鏡をかけたたり、新しい帽子を冠つたりして、身装の虚飾に心をくだくことあだかも婦女子の粉飾にもひとしい。

そして、一人前のサラリマン・スタイルにはまりませ、あつばれ天下の月給取面して大に納まつてしまふ。

そして、朝八時出勤夜五時退出をくり返し月給とりのための月給とりとなり、毎日毎日電車に

のつて、勤務先に通ふ。これをもつてあだかも、自分の行くべき當然の常道であり運命線に即するものであるとなしてかへりみない。

月給日などは、サラリーの袋をさかさにして、カフェーの女給や料理屋の女中にフザケちらして翌る朝になつて幻滅の悲哀を感じ、月末の下宿代に大違算を生じて青くなる位が關の山である。成程、月給取り——高からうが安からうが、雇主がある以上、風雨寒暑、毎日事務にテクリついで、朝から晩までコツコツはたらけば、どうやら三度の御飯にありつけよう。そして、一年に一回二年に一回拾圓とか五圓とかの昇給がある。

月給の上るのを楽しみにして、アクセクはたらく月給取根性のさもしさ。學校を出て一兩年はすぐ消へる。三十の聲をきいては、親父から小使錢をせびり出すのにいさゝか耻しさを感じる。それに下宿生活でもあるまいといふので、縁者をさがして、結婚をする。一二年にして、新婚の夢がさめる。子供が生れる、暮らし向が悪くなる。幻滅の悲哀と現實暴露の悲哀が一緒にやつて来る。したがつて家庭に風波がたへない。自然、内に楽しむことをやめ外に面白さをもとめる結果となる。

そのくせ、子供の生産率は旺盛な勢ひで進み、五年の間に二人の子供の親となり三人の子供の父となる。

しかし、月給はその割合には上らない。うき世はまゝならぬを歎じて見たところで、いまさらどうすることも出来ない。

妻子を養ふために、一家の主として相變らず安月給取りの生活から足を洗ふことが出来ない。

五 慘め極る月給取り生活の末路

春の郊外に、生活の脅威と不安につかれた營養のよくない血色の悪い安月給取りの家族の散歩姿を見るとき、筆者は無限の悲哀に胸をつかれるのを覚える。實になるまじきは、安月給取りの生活であると沁々、痛感せざるを得ないのである。

兎角する中に人生の惨苦や不如意が芽を吹き次第次第にドン底生活の基礎に根をはつて行く。やれ病氣である。さては不慮の災難だの次から次へとやつて来る。

かて、加へて、御手元不如意、御臺所不如意となるに反し、なくとも足りる子實はだん／＼ふえて来る。あつてもあつても足りない収入は思ふ様にふえて来ない。

勢ひ最低限にキリつめた生活費で生活しなければならぬ。晩酌もロクロク呑めず子供にも活動寫眞一つのぞかせることすらむづかしい家庭經濟の窮迫、結局は、七ツ屋へ妻君をはしらせなくば、救ふべからざる危急に瀕するのである。

さても悲しむべき安月給とりの生活よ！

將來に希望あるでなく前途は暗澹、現在の生活は、まるで豚のそれにも未だ劣るありさまであるとすれば安月給取生活は人間苦の最も悲惨な現はれであると見なければならぬ。

月給取りとなるその當初に於て誰もが之で、將來はあつばれ昇進昇給して、課長から支配人さらに累進して重役社長たらんとする夢の如き理想と光明を有てゐたであらう。しかし、現實的事實は餘りに悲惨ではないか。

人の頭数が多い。雇主の身になつて見れば左様簡単に安くおろすこともならず、精々安い月給

でコキ使ふことになる。

上品な内勤事務員を希望する青年の心！「それは、退いて守る」浪嬰主義の生活である。何故「進んで取る」進歩向上の進路に躍り出さないであらう。

活動の第一線に立つて、花々しい決戦をつゞける勇氣のないあはれ現代商業青年の意氣地なさ。大學を出たのにこんな、つまらない仕事をさせると不平や自棄を起して見たところで、雇主の方から見れば、他にいくらも人がゐる。そんなにイヤなら止して貰ふまでのことであると、すでに覺悟の肚をキメてゐる。

筆者は、現代の商業學生——多年諸君に對してあくまでも、男兒いたづらに安月給取りの群に投ずる勿れ！とさげぶ。

といひ、どんな苦勞骨折があつても、安月給に、自由を縛られ生活を縮まされおまけに一生浮ぶ瀬なき貧乏線下に沈底して、コキ使はれて暮すよりは、むしろ獨立の新生活に擡頭して、奮闘努力すべきである。

悲風慘雨前途に見舞ふとも、安月給で使はれるよりは愉快である。人間としての自由さがある

生活そのものに意義がある。

然るに現代青年の多くは、滔々として、安月給生活に自から没頭するの愚劣さ加減、實にはれまざるを得ない。男らしい勇氣と決心とを振り起して、獨立奮闘の道に突進することは、眞に男兒の快業ではないか。

六 獨立生活は男兒の快業

人に使はれるのが將來自分で仕事をやるときの經驗である——要するに月給取りは人を使ふ生活に進む一つの前提であるとリクツをつけて見たところで、所詮それは、寢言にひとしい空言である。

またあるものがいふであらう。現代の如き大資本主義の商業時代に於て、千や二千のはした金では思ひ切つた仕事が出来ないからむしろ進んで、冒險線に立つよりは、退いて月給取り生活に入るに如かずと。

かうした引込思案と退嬰的な心からして、現代に於ける多くの青年は自からの責任を回避すべく、難をさけて易きにつく、けだし餘りに世渡り術が小利巧にすぎると言はなくてはならない。さうしたケチ臭い考へを捨て、天下に何事かをなした方が如何にその生活をして意義あらしめることが出来るだらう。

もし一朝、月給取り生活よりはなれなければならない場合——冗員の淘汰乃至は整理緊縮によつて、職を失ふた場合、それはあたかも木から落ちた猿にもひとしく、一家は路頭に迷はねばならぬであらう。家に老後の養生を送るべき恒産や貯金を有するでなく莫大の退職手當や慰勞金を貰ひ得ぬとしたならばどうであらう。

安月給取りになつたばかり、さうしたうき目を見なければならず、今となつて嘆いて見たころで、詮なき次第とあきらめなければならぬ。

むしろ、大きな勇猛心を振ひおこして、青年らしい快業を企て、前途の飛躍を待望して努力奮闘するならば、例へ事成らずとするも人生生存の意義がある。

七 大に儲け大に費ふのが金儲けの本望

現代のある大實業家の言葉に、「日本人は郷土が狭く物資も豊富でないため徳川三百年の間に禁慾主義で育てあげられた結果、どうも國民性がいぢくれてヒステリカルに出来上つてゐる。

人生の最大目的が健康でうまい物を食つて、長生することにありとするならば、大に働き大に遊び、飽満な經濟生活をなすにある。何も自から好んで安月給取りに墮し、貧乏生活に甘んずるの要やあらん。かくて一生を肩身せまくして、營養不良に蒼い顔をする必要がないのである。日本國民の生活はこの意味の人間生活——幸福なる人生の目的から非常に遠ざかつてゐる。何しろ儉約第一が唯一の美德であると思はれてゐる。

こんなことでは、到底大きな經濟生活の發展などは到底望んで得られない。

一生涯貧乏生活にクヨクヨして不平多き不幸な生活をつゞけて行くより、他に途がない。

ソコへ行くときは米國だ。米人はみんな快活でそして、何れもノビノビした氣分で、雄

大豪放な計畫を實行してゐる。

すべてのやり方が積極的で民族の發展に資してゐるではないか。よく考へて見るとこれは母性擁護のためで、結局國民が健全になるゆゑである。しかるに、安月給取りの生活——暗澹たるその臺所を見ると、そこからは到底健全なる日本の新國民が胎生するとは思はれない一家一身の不幸不運は別として、日本將來の國勢の程が心配でならない——と喝破してゐる。實に味ふべき説であると思ふ。

八 安月給取りは貧乏生活の前提

われ／＼は自分で自分の幸福な新生活を打開して自奮自發しなければならぬ。何も安い月給に身をまかせて、一生勞苦多き貧乏生活を送らなければならぬ理由や必要があらうか。

われ／＼は生れながらにしてさうした惨めな心さもしい約束も運命も、義務も、責任もない筈である。われ／＼はわれ／＼自身のよき、頭腦と計畫とをもつて、よりよき生活に進むべき自由

を與へられてゐる權利を有つてゐる。

貧乏が人間を美化したのは過去の夢となつた、清貧に安んじなどは、現代の黄金主義の世の中には、亡者の囁言にもひとしい。

現代は物質的威力によつて、よりよき人間たり得る新時代である。幸福も平安も、すべて黄金の輝やかしき光彩に、さんらんたる光を放つ。

人生生活の眞局面はまさに、幸福と平和とにめぐまれ、みたまるゝことに存する以上、貧乏は絶対に折けなくてはならない。

われ／＼はわれ／＼の力をもつて、貧乏を打破して富者の榮位につかなければならない。先づそれには安月給取りにならぬことである。

いくら背に腹は代へられぬとしても自から安月給取りの群に投げ、一生うかぶ瀬のない貧乏生活に陥没せぬことである。

安月給取りの生活は、貧乏生活の第一歩であり、獨立生活は金持生活の第一歩である。人生最終の大目的は、貧乏人たることに非ずして金持たることにある。金持の生活は、衣食た

つて、禮節を知る支那の哲學に共通してゐる。要するに洋の東西、時の今古を問はず貧乏は人生苦勞の製造所である。富裕は人生歡樂の大殿堂である。

九 獨立生活は金持となる第一歩

われ／＼は年若き青年をして、その前途に進むにあたり安月給取り生活以外に新しい仕事に着眼すべきことを勧告し忠告してやまない。

貧乏と金持との分岐點は、安月給取りたると否との一線に存してゐる。たとひ一時——比較的長い間にわたる苦しい貧しい生活を送るものとして、獨立者の最後に於ける人生生活は明い光明と美しくい希望に輝いてゐる。

老後の安泰、子孫の長久——それは富む者に與へられたる天の恵みである。この特權を行使すべく、人間といふ人間は平等にその權利を有てゐる。われ／＼は貧乏生活に沈淪することを回避するならば、先づこの權利を行使するに努力奮闘しなくてはならない。

地上の幸福は、自から勞することによつて見出さるゝものである。われは勇ましく戦はなくてはならない。

そして、華々しく勝利の凱歌をあげなければならない。その最もよき可能的方法として「獨り勇ましく立つ！」の信念をもつて安月給とりより獨立生活へ——と勇奮躍進しなくてはならないのである。

第五篇 獨立で資本を調達する最良方法

一 一文なしでは商賣が出来ぬ

何か新しい商賣を始めて、ウント一つ儲けて見ようとしても、一文なしでは何も彼も駄目である。誰が何んと言つても先立つものは金である。獨立資金なしに仕事が出来ない。

誰でも、獨立して商賣するのを欲しないものはない。他人の家に雇はれ、使役されて甘んずるものは一人もあるまい。

只種々の事情の爲めに獨立して開業する資本もなく、さりとて爲すこともなく詰らなく暮らすも不利益であるから、一は仕事を覚えるため、一は獨立して開業する機会をつくるために、自分の意思に反して、他人のために使はれてゐるものか定めて多い事であらう。

それはさておき、苟くも獨立して新しい商賣を始めるには是非相當の資金をもつて、始めなければならぬ。

然しながら、この資金といふものは、誰でも皆持つてゐるといふ譯のものではない。さればと

て資本がなければ商賣は出来ない。

故に先づ獨立自營する必要な資本をつくらなければならぬのである。

ところがこの資本の足りない爲め又は全然資本がないために、折角獨立開業の志があつても、これを實行することが出来ず、又規模を擴張することが出来ずにある人が少からずあると思ふのである。

二 先づ最初の百圓を得るには？

これ等の人々は、如何にしたならば資本をつくる事が出来るかといふ事について、いささか筆者の信ずる所を述べて讀者諸君の参考に供したいと思ふのである。

いふまでもなく商人の資本といふものは、天から降つて来るものでもなければ、地から湧いて出るものではない、皆人間各自の奮闘努力の結晶が金といふ有形物に變じたものにすぎないものである。

また今日數千萬圓の資本を有する人々について見るも、最初から巨萬の資本を有して居つた譯のものでもなければ、又父祖傳來の資本を繼承したものでない。

多くは皆僅かの資本を蓄へて之を有効有利に運用し活用してその利殖をはかつた結果に外なぬのである。

されば、手に無一物の人すなはち無資本の人々も努力勤勉して零碎の資本を貯蓄してこれをヨリ有効的に活用さへすれば、獨立營業に必要な位の資本を作ることには左程むづかしいものではない。

尤も單に獨立營業に要する資金といつてもその額は種々あるものである。小規模の營業なれば千圓内外位でも、出来るし、又三百圓位の資本をもつても出来るのである。

然し、讀者諸君の中には千圓や三百圓は愚か、百圓の資本を調へることも困難だと言つて獨立營業に對して失望悲觀をされるかも知らぬが、靜かに考へて努力奮闘すれば、比較的短期間の貯蓄實行によつて、百や二百の資本をつくることは、容易に出來得る筈である。

三百や二百の資本は朝飯前のこと

然し、抽象的に茲に易々たるものであると言つても、その意味が餘りに漠然として、讀者諸君の中には諒解に苦しむものもあるであらうから、茲に計數に基いて資金調達の根本を説いて見やうと思ふのである。

昔日に比較すれば凡ての點に於て物質が騰貴してゐる今日の事であるから、従つて給料や手當賞與なども自然昂騰してゐるのである。

故に諸君の日常生活使用の中から一ヶ月五圓を貯蓄する位の事は大してむづかしいことではな

と思ふ。

銀行會社 商店員及官吏になつて働いても又は職工となつて工場に勤めても、或は丁稚小僧として年奉公をしても、又尙一層下落して道路掃除夫になつても、一日二圓や二圓五十錢位にはなるのであるから、この中から一ヶ月五圓を貯蓄する位のことには極めて生やさしいことであ

る。

さてこの五圓が一月や二月では何にもならぬが、二十ヶ月貯蓄すれば百圓となるのである。それに銀行の利子を加算すれば、それ以上の金額となるのであるが、今は利子を計入しない。それ以上の貯蓄が出来れば尙更結構のことであるが、二十ヶ月百圓の貯蓄をする位の事が何人にも容易に實行化されるから、今は最少限度について述べるのである。

二十ヶ月で百圓を貯蓄したところで、獨立營業の資本には足らぬが、この百圓を土臺として獨立營業の資金の端緒を開くものと認めてもよからう。

然らば、この百圓を如何にして運用すべきかといふに、その採るべき途が少くとも五つある。先づその第一方法としては右の百圓の金を手元に死蔵して置くことである。これは勿論一厘半錢の利子も生まぬから運用の方法にはならない。従つて殆んど問題とはならないのである。

第二は郵便局の郵便貯金として預けることである。これは政府の管理に屬するものであるから確實、安全の點に至つては郵便貯金に優るものはないと言つてもよい位である。

然し、郵便貯金は何といつても利率が年二分八厘であるから、百圓を一ケ年郵便局に預けたと

ころで百二圓八十錢となるにすぎないのである。

郵便貯金は利殖の方法に於ては確實、安全ではあるが、利率が低いので餘り生産的な方法とは言れない。

四 資本増殖の便法として

第三は銀行に貯蓄することである。銀行は郵便局とは違つて少し利率が高いのである。

殊に貯蓄預金であると普通預金は年三分位であるが、貯蓄預金は年三分五厘の利率であるから百圓を一ケ年預けて置くときは壹百參圓五拾錢位となる譯である。

郵便局に貯金するよりは利殖の點に於てはるかに優つてゐる。

第四は勸業債券や農工債券等の債券に投資することである。それは額面百圓券のものが九拾八圓で買ふことが出来、且つその利子が年三步乃至四分である。先づ、最近のものについて、述べると、事變債券が募集されてゐるがこれは額面十五圓が十圓で買へ割増がつき有利である實

際（さい）の利廻（りまわ）りは最低（さいてい）が三分五厘弱（ぶんごりじやく）、最高（さいこう）が四分（ぶ）につてゐる。その、興業銀行（こうぎょうぎんぎやう）の社債（しゃさい）などについて見ても大體（だいたい）これに準（じゆん）じたやうなものである。

これは利殖（りしき）の確實（かたじつ）な點（てん）から云（い）へば、郵便貯金（ゆうびんちゆうきん）に劣（おと）らずして利率（りりつ）が高いから銀行貯蓄（ぎんかちゆうちく）に優（まう）るとも劣（おと）つてゐないのである。

第五（だいご）は、最も確實（かたじつ）なる營利會社（えいりくわいしゃ）の株式（かぶしき）に投資（たうし）することである。勿論（もちろん）有望（いうぼう）なる會社（くわいしゃ）の株券（かぶけん）は額面（がくめん）拂込（はらひこ）み五十圓（ごじゅうげん）のもの、百圓位（ひゃくげんご）の金（かね）では買（か）へるものではないが、然（しか）し又物（またもの）によつては五十圓拂込（ごじゅうげんはらひこ）みのものが五十圓乃至百圓位（ごじゅうげんたいていひゃくげんご）で買（か）へるものもある。

これらの年利率（ねんりりつ）が何程（なんぢやう）に當（あた）るかといふことは各會社（かくわいしゃ）の營業狀態（えいぎやうじやうたい）によつて差異（さいい）があるのであるから一様（いっやう）にのべる事は出來ぬものであるが如何（いか）に少（すく）くとも年七分（ねんしちぶん）や八分（はつぶん）に當（あた）らぬものはないやうである。

五 五百圓の資本が四千六百五十六圓

以上（いじやう）述べた五つ（ご）の方法（はうほう）の中で何れ（なんれ）が最も有益（もつとゆうえき）であるか、何れ（なんれ）が最も利殖（りしき）に便利（べんり）であるかは、特（とく）に研究（けんきゆう）するの必要（ひつよう）もなく、何人（なんびと）も一目瞭然（いちもくりょうぜん）容易（りやうい）に理解（りかい）されるところであらうと思（おも）ふ。

かく述（の）べたところ（ところ）のものは、何れ（なんれ）も確實（かたじつ）の點（てん）に於（お）いては確實（かたじつ）の上（うへ）もないものであるが、利率（りりつ）の點（てん）に於（お）いては極めて僅少（けんせう）なものである。苟（いやく）くも何か確實（かたじつ）な而（しか）も相當（きやうたう）な仕事（しごと）に投資（たうし）するならば、年（ねん）に二割位（にわりご）の利益（りえき）を得（え）ることは決してむづかしくはないのである。

尤（もつと）も投資（たうし）した目的物（もくてきぶつ）が消滅（しょうめつ）したり、或（あるひ）は破損（はたん）するやうな事（こと）では全然（ぜんぜん）資金（しきん）を消滅（しょうめつ）するものであるが、然（しか）らずして確實（かたじつ）に成立（せいりつ）して行く（い）くもので年二割位（ねんにわりご）の利益（りえき）を得（え）られぬこと（こと）はないのである。

これは最少限度（さいせうげんどう）の見積り（みけり）計算（けいさん）であるが、今（いま）假（か）りに年二割（ねんにわり）の利益（りえき）で百圓（ひゃくげん）を十ヶ年（じゅうねん）間（かん）そのまゝ（ま）に貯蓄（ちちく）して置（お）くならば、五年末（ごねんまつ）には二百四十八圓八十三錢（にひゃくしじゅうはちじゅうさんぜん）となり、十年末（じゅうねんまつ）には六百十九圓十七錢（ろくじゅういちじゅうしちぜん）となる。十五年末（じゅうごねんまつ）には一千五百四十圓七十錢（いちごひゃくしじゅうしちぜん）の多額（たがく）となる譯（わけ）である。然（しか）し、これは年二割（ねんにわり）と見ての計算（けいさん）であるが若（も）しもう少し（すこ）しく機轉（きてん）を利（き）かして百圓（ひゃくげん）の資金（しきん）を年二割五分（ねんにわりごぶん）で二十ヶ年（にじゅうねん）間（かん）据置（き）ければ九百三十一圓三十二錢（きゅうひゃくさんじゅういちぜん）となり、十五ヶ年（じゅうごねん）間（かん）据置（き）ければ實（じつ）に二千八百四十二圓十六錢（にせんぱちひゃくしじゅうにぜん）となるのである。尤（もつと）も、十五年（じゅうごねん）といふ長い期間（きかん）資金（しきん）を得（え）るために苦（くる）しみを重（かさ）ねるといふことはナカ／＼堪（た）え難（がた）い

事であるが、二年や三年の辛棒は何人にも出来ないことはなからう。若しこれが出来ぬといふ位の人であるならば、その人は資金の利殖をなし、獨立の念ある人ではないと言つてもよいのである。

然るに以上述べた計算で、資本の百圓を増加して假りに五百圓として之れを十ヶ年間年二割五分の利益を得るとして計算して見ると驚くなかれ、四千六百五十六圓六十一錢の多額に達するのである。百圓を貯蓄することは一ヶ月間五圓宛二十ヶ月の苦心にすぎないがその苦心を辛棒して今少しく繼承して少くとも五百圓の貯蓄を得るまでやり通すといふことは左まで困難な事ではないと思ふ。

故に右の計算で二割五分づゝ年に利益を上げて行くとすれば十ヶ年の後には右の如く尠大な金額になるのである。

六 資本は活して働かせるもの

これだけの資金があれば、一寸した獨立商業の準備とするには澤山であると思ふ。

尤も、物價昂騰の今日而も不景氣時代、右の資本だとして獨立の營業を始めるのに十分であるとは云へぬが、人間の慾を云へば、際限のないもので、百圓の資本よりは千圓の資本があれば營業も擴張され立派に出来る。又千圓より二三萬圓乃至五六萬圓もあれば、各自の理想に叶つた獨立營業を立派にやる事が出来るであらうが、右の資金なくともその運用の方法如何によつては立派に獨立營業がやつて行かるゝものと信するのである。

凡そ、資本を活用するの途は、單に確實であるといふ點ばかりでは巧みなる資金の活用とは言ひ得ないのである。

郵便局や銀行に貯金して置いて、低い利率の収入では、資金の活用でなくて、死用にもひとしき結果を見るのである。

多少の冒險——大膽なる資金の運用、ほんとうに生きた資金のはたらかせ方をしなければならぬのである。

郵便局や銀行に預金し、その利子は十ヶ年の後と雖も僅かなもので、その額も知れ切つたもの

である。安全確實には相違ないけれども坤乾一擲といふやうな大きな仕事——いな大きな金儲が出来ないのである。

七 小資本を大資本化して

如何に商賣が少くとも 資金をはたらかせることに意を碎き、苦心工夫する所あるならば、天下何人も容易に、年二割乃至三割の利益をあげ得らるゝであらう。

ましてや、少しく機敏に、金儲の着眼そのよろしきを得るならば、二三割は愚か五割も十割も利殖することが出来ることなほ可能である。かくすれば、大資本調達の前提となるべき小資本の調達利殖の途が頗る迅速に、而も、最も短期期間内に、豫定以上の資金を獲得し得らるゝであらう。

要するに、薄志の人、若しくは無資本の人が資金を調達するため僅少な資金を増加して行く道は、巧みにその資金を運用し活用し且つ機敏にやることが何よりも必要な事である。

危険の多いところに投資することは勿論見合はせなければならぬ。然し如何に目的物が確實であつても、餘りに低利では、利殖の速度がおそいから郵便局の貯金や銀行預金の利殖では、その資金を自由自在に運用するといふことは不可能である。

單に自分が貯蓄して置くよりは優つてゐるが手取り早く資金を調達する方法を採らねばならぬ。巧に資金を運用する人は僅かな資本を持つてゐても、僅かの期間内に莫大な利益をあげるのであるが、資金の運用が拙劣で有ると多額の資金を長い期間貯蓄してもその利殖は極めて僅少である。

八 自力で調達する資本は眞の資本

零碎の資金を根氣強く多年の間貯蓄し且つ運用を計れば、無資本の人にも相當の資本を得ることが出来るし、また堂々と一家を構へて營業をやつて行くことが出来、したがつて、それ文餘分の富を致すことが出来る。

然しながらこの貯蓄した金は、一定の年限に達する迄は、又一定の金額に達するまでは決して手をつけぬといふ固い決心がなければならぬ。

最初からこの金はないものと思つて消費せぬやうに決心してかゝらなければならぬ。

折角の貯金や、資本を忽ちの間に消費し食ひこんでしまつては、何にもならないのみか世にい

ふいはゆる蛇蜂取らずの結果になるのである。

斯くして努力勤勉常にその利殖の途を巧妙にかつ機敏に工夫苦心したならば、無資本の貧乏人と雖も、餘裕綽々として獨立開業が立派に出来るのであるから、少しも平身低頭をして先輩や親戚などに金の同情などを乞ふ必要がない譯である。

自分で働いて、自分で貯へて、自分で貯へた資本で、微々たりとも他人の力を藉らずに獨力でもつて開業し而して、社會の活舞臺に活動するといふことは、人間としてまた一個の男性として痛快極りなきことであり名譽であり誇りであると言ふべきである。

誰にも憚るところはない。皆自己の努力勤勉の賜である。これでこそ眞に意義ある獨立獨行の人である。かくの如き人でなければ、終局の成功は得られないのである。

要するに、獨立開業資金の調達的基础は、平素不斷に於ける勉勤力行の結果によつて得たる貯蓄を巧妙にしかも機敏に、運用し活用する工夫苦心の一點に存してゐるものであることが明かな事實となるのである。

第六篇 巧に資本を調達する方法

一 萬と纏つた金より百圓の調達が困難

抵當物件でも澤山持つて居り、信用でもあるならば、資本の調達難も、ヘチマもないが、貧弱な無資本者が金を他から借り入れるといふことは頗るむづかしい問題である。

百とか二百とかといふ金は、一萬五萬といふ金よりも借りにくいものである。一萬、五萬といふ金の出る向きは對手が異ふので、額面は大きくても話が案外早い。百や二百といふ金を借り入れる向きは、まったく無産者である。借す方でもなか／＼なもので、小商人の金融上に困るのは到底大商人の比ではないのである。

銀行なども大中流商人のために有るやうなもの、小商人のためにはないと言つても、或は過言でないかも知れぬ。或はいふ、それは商人側の罪だ。銀行は利用を待てど、商人側から利用せないので。いふと眞實で、この點は小商人として大に考慮すべき大問題であらうと思はれる。この小商人の銀行利用問題は別項に述べるとして、差當り、特別方法による資金調達法について説い

て見よう。

二 高利資本の融通は商賣の大敵

小商人の資金調達は、自然銀行以外他に金融の道を見出さなければならぬことになる。この個人の金貸をいはゆる高利貸とは謂ひたくも、認めたくもないが、事實は皆とは言はれぬとしても、大部分そうらしいのは遺憾である。

借る商人としても、金利以上に利益を得る見込があるから、高い金利を出して借りるのだけれども、一概にのみとは謂へない。筆者の知る範囲内に於ける事實として、つぎの様な方法がある。

といふのは、地方で中位の店で、勿論潤澤な資金で商賣してるといふ店ではない、或銀行との取引関係は出来たが、近頃の景氣の關係から銀行の方でも貸出しを非常に警戒してゐる際、二三の取立手形の支拂期限がせまつて來たので、銀行へ種々相談したが應ぜられない。それはいづれが無理かは局外者として容易に窺知すべくもないが、要するに、商人の方では、その手形を

不拂とすれば、この後の取引關係上重大なる影響を蒙るといふ點から、或高利貸から高い金利のついた金を借入れてそれを決済したといふことである。

この様な事は多くあり得ることで、小商人として、實に苦しい立場である。然し外に方法がないとすれば、この方法も一時の彌縫策としてよからうが、考へて見れば、何とかよりよい方法が有りそうなものにも思はれる。

三 資本調達機關としての金融講

或地方では、講會なるものが流行する。流行といふと一寸語弊があるかも知れぬが、やはり流行の一種に相違ないので、小商人のみならず中、大商店も亦金融の一方方法、資金調達の一方方法としても、進んでこれに加入する。

講會とは、いはゆるたのもし講で、この方法には二三種ある——即ち抽籤により當籤者を定めるもの、入札の方法によるもの及び抽籤、入札、貸附等の方法を混用するもの、これは商人の金

融方法の一種として、資金調達の方策として前述の方法にさまるものと信ずる。

けれども、それはこれを善良に運用してのことで、加入者の考へや、やり方では、如何にもなるといふのは、發起者又は加入者の不確實な、不徳義な行爲から思はぬ損害や迷惑を蒙ることになり、又入札による方法は自己の必要に迫られて、思ひ切りに安く入札し、落札金を運用しやうといふ考へから、決局、商利に當る事も意とせぬといふ事が少くない。

もしこれ等の講會なるものが、完全に善良に運用せられたとしても一個の講より金の融通に頼るは一回であり、これもこれが自分の任意には出来ぬ。是非となれば無理して入札したり、他人に抽籤をしてのち金を出して譲つてもらつたりする方法に出なければならぬので、決局は高利に當ることになる。

そんな都合故、少しは無理しても、澤山な講金に加入してかへつて困り切つてゐる人もある位で深く考へて見れば普通の講では商人の資金調達の方法としては無理でありかつ缺點が多い。

四 面白組織の無盡講

先年來各地方に出来た無盡講會社のやつてゐるものは、その基礎さへ確實なれば、前者より適當ではあるまいかと思はれる。それは一概には無論云はれないけれど、筆者の手帳にある某無盡會社の三千圓講會規定により見ればその給付規定なるものが、抽籤、借受入札、取退入札、滿會給付等の四つに別たれ、取退入札の制限等も制定してあるので、諸種の點に於て都合がよい様と思ふ。

この講について、面白い話がある。或商店の主人は、先年非常に資金に困り、某無盡會社の二千圓講に加入した、所が幸にも二番會か、三番會で本籤に當籤し、二千圓と纏つた資金を得て店運を挽回したといふことである。

今一つの商店で、それは知己からの勧誘で無理に加入せしめられ、發起會に行つて見ると、何でも二百の會員が集つて、大盛況、處がさすが商賣熱心な商人であつた丈あつて、ウン、成程一

れは面白いぞと考へて、毎會出席、自から出席出来ぬ時は、店の一番腕きゝの店員を代理出席させ大いに外交手腕を發揮したものである。さうして毎回花くじとして拾圓以下壹圓まで空くじなしといふので、これを外に本籤其他で金の手に入つた向きへ盛に活動して居られるが存外賣れるそんで、或人などは、妻君名義で加入してゐたので當籤したのでウンと馬力をかけて活動した結果は、其講が參千圓ではあつたが、其店としては、珍らしい一日五百圓の商ひをしたといふ。

この様な副産物は商人として、決して見逃すべからざるものであるが、終りにこの講の給付金につき少し附加へて置く。

即ち本籤は當籤者の規定の參千圓を給付し、最後まで初より同様の金を掛け戻すもので借受入札は、その入札額——借受金額を入札して、出の少き物を當籤者として貸出する掛戻しは初めよりの金額同様取退入札は掛込金額に相當金利を添加した制定規定以上の入札中の入札金低きより當籤者とし、これには相當の取退納金といふものであつて講會規定の金額を納金といふものがあつて講會に規定の金額を納付する事としてある。

かうして最後にのこつた十數口が講會給付となるので講會給付は規定の參千圓と、金の清算殘

金の五割と分配される権利があるので其の實五千圓は給付されることになり、清算残金の残り五割は會員一同の決議により處分する事になつてゐる。

五年賦賞還法による資本調達の便法

筆者の知れる某君は、永く店員生活をしてゐて、少し貯金も出来て、商賣上の経験にも自信が出来た。それで一つ獨立開業しやうと思つたが、どうしても資金が今一千圓餘り不足だといふところから次の様な企てをやつた。

それは、金を借りる時、貸す人の先づ問ふのは、その金の使途で、如何に運用される如何ほど位ひ利得があるのといふことで他人の事だからとも思はれるがその資金が善良で確實で、利益あれば、借す方でも心配が少いのである。

次に、如何にして何な方法で返済するかといふことである。人はよく返金の申譯に一度に御返し致します、などいふが、その實、一度に返すといふことは少しまとまつた金なら多くの場合困

難である。そこで、今商賣を初め、壹千圓の融通をつけて貰つたにしても一度に返済は容易ならぬことであると考へたのである。

こゝに於て、某氏は次の年賦償還表なるものを作成して、この目的で、かう使用し、幾何の利益があるを目論み、さうしてこの方法で返金致しますからと、某方面に相談に及んだところが、その相談の仕方が條理明確で正直であるからとて、特別に低利で、相談に應じられたといふ。

年賦賞還表

年次	元價	金還	累計	利子	合元	計利	月額	備考
第一年	一、二〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	二、二〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	一八、〇〇〇	十二月ハ二十二圓
第二年	一、八〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	三、〇〇、〇〇〇	八八、〇〇〇	二、六八、〇〇〇	二二、〇〇〇	二二、〇〇〇	十二月ハ二十六圓
第三年	一、八〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	四、八〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	二、五〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	十二月ハ三十圓
第四年	二、四〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	七、二〇、〇〇〇	五二、〇〇〇	二、九二、〇〇〇	二四、〇〇〇	二四、〇〇〇	十二月ハ二十八圓
第五年	二、八〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	二八、〇〇〇	三、〇八、〇〇〇	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇	十二月ハ三十二圓

彼は又この返金額を日割として、それだけはきつと餘分に賣るといふ考へで努力奮闘し、確實に返金しつつあるから信用をいやが上にも厚うしてゐるといふ。最後に一つの筆者の新しい提案を發表して讀者諸君の研究材料としたい。

六 資金調達の新らしい試み

これはぜひ素人同業家になくても、是非商賣人でなくてはならぬといふことはない。同志を十人二十人、餘りに多くつても面倒でもありまた容易にあつむることは出来ないものであるから五人位でも出来ることである。

先づ一定額づゝ同志組合員より集合して。始め一ヶ年だけは銀行に預金する。その一定額といふのは、どうにもなるが、出す入らす月額三十圓とし、それを月末集金としてもよい。或は日割とすれば不知不識の間に積まれるから事情によればこれがよろしい。夕方でも各々店員を自轉車で走らすれば、何でもない。すると先づ組合員十名として月額三拾圓とすれば、月三百圓年三千

六百圓で、これに相當の金利もつく。

第二年以後も積立金は前同様實行する事にして、一方積立ると共に、組合員に限り相當金利で貸つける。之うして積出金の方は四五年の後中止してもよい。かうなるとお互に、不知不識の間にまとまつた金が貯金されると共に金融の都合が非常に都合がよい。その金利も他人に仕拂すにすむことになる。之うして、相當金が積れるから、お互にどんな仕事も出来、銀行や金貸のところへ出ても、ピヨコ／＼叩頭しなくともよろしい。

同志一人で及ばぬ力のところは、多數の力の集合に持つの外はない。時代は新しい。金があつまらない。資本がないと言つて、悲觀してゐる時期ではない。

右の方法に似よりの方法で、成功した實例がある。それは、其他で、同級會の席上一寸したところからお互に少し貯金して何か仕事をしようじやないかといふことから毎月三圓の金を十人ばかりで積立ることになり四五年してこれをもつて組合の事業を行ひ大分儲けたが、後解散することになり各自千圓以上分配したといふ。

七 貧乏人でも容易に出来る金融機關

以上の實例によつて、いくら貧しい無資本の人でも、その方法よろしきを得に於ては、容易に無より有を生ずるの眞理をつかみ得ることを事證的に説明したにすぎない。

讀者諸君のよき頭腦と而して、よき計畫とをもつてするならば、まだく面白方法、金をもとむる新工夫が、立案設定せらるゝであらうと信するるのである。

筆者は、いたづらに資本難を歎じて見たところで、一厘半錢も生み出すことが出来ない以上、須らく金をあつむる——方法及組合をアタマで考へ出すことが肝要であることを力説してやまないのである。

然らば、立所に相當の資金が得られ、計畫を直ちに實行に移して、相當の業績と利益とを擧げ得らるゝに相違ないと確信して疑はないのである。

百の説法は屁一つで解決される。筆者は、これ以上くどくしいことを言つて理窟をいふのが

むしろ蛇足であると思ふ。

讀者諸君よ！奮起一番考ふることをやめ、いまスグその實行方法に着手するがよい。

第七篇 銀行の利用と金の借り方

一 資本の缺乏は何によつて補ふか

我が國には未だ正確なる統計がないから、能く分らないが、米國に於ては、商業の失敗の約三分の一は、何れも資本金の缺乏に因由するといはれてゐる。

これから見ても、商賣をやる上に於て、資本金の充實が重要な問題なることを知ることが出来る。

然るに近時の商賣人の多くは、顧客の吸收とか、あるひは廣告宣傳のやり方等のみに没頭して未だこの重大なる資本調達に關する何等の考慮を費さぬものゝ如くに思はれる。

ひとり商店に限らず、すべての企業經營家が、必要以上の資金を手許に有するは、經濟學上から見ても、資金の能率増進から見ても、極めて不經濟かつ不得策である。それ故固定資本に於ても又は流動資本に於ても、みだりに過大の資本を擁することなく、常に最少の資本をもつて最大の效率を發揮することを努めねばならないのである。

言を代へて云へば、資本を最も有利有效に使用し、苟くもその空費無駄をさけいませなければならぬのである。

いはゆる資本缺乏のために、失敗に歸せる商店中には、必ずや眞に資本の缺乏せるに非ずしてむしろ資本の運用をあまり、資本の空費くひこみを生じ、ために資本の效率を甚しく薄弱ならしめ、その結果として遂に資本の缺乏を訴へ、商賣の手ちがひとなつて現はれたのであるまいか。

されば、成るべく過剰の資本を有せず、恰度必要なる丈の資本を投じて、これを出來得る限り有效にかつ有利に運用して、最高最大の能率効果を發揮し、もつて商賣の一大繁榮を畫すべきである。

二 信用に百萬金の値打あり

然し、小資本小規模の商賣人にあつては、過剰なる資本を不經濟に使用する現れよりも、むしろ

ろ、有望なる使途と有効に投下すべき資本に缺乏するの憂ひが多いものである。

ことにこの資本の缺乏は、未だ基礎固まらざる新事業に於て、最も多く見るところである。すでに、基礎確立し、久しく經營し來りたる事業にありては、たとへ資本金の缺乏することあつても、これを他より融通することが比較的容易である。

ところが、新に起されたる事業にありては、果して之れに十分の資金を投ずるも、その營利力が強大なりや否や、十分營業成績をあげ得るや否やが明瞭でない。すでに、其の營利力が確實であるか否か分らないのであるから従つてかゝる事業に資本を投じ、又資金の融通は流るものが少く、新事業は得て資本の缺乏を最も訴へ易いものである。

實際今日の大成功をもたらせる大商業大工業の如きも、もとは微々たる小資本より起り今日見るが如き大なる結果を現はすに至つたのである。

而して、彼等は長き期間にわたる刻苦精勵つぶさに辛酸をなめ、小資本をして驚くべき大資本化したのである。同時に、又彼等の成功をより大ならしむべくこれを助けたるものは、實に彼等の信用であると言はねばならない。

事業の基礎未だ確立せず、而かも事業の繁榮のため有效にかつ有利に使用すべき資本の缺乏による危局にのぞんでは、如何にしても「信用」の力にまたなくてはならない。「信用」の威力と聲譽によつて、他より新しく、資金の融通調達をうくる外にないのである。

ダニエル・ウエプスター氏がかつて「信用は國富を増進する上に於て世界の凡ての鑛山よりも千倍の貢獻を存せり」と云つたのは、信用の力が實に事實の成功、國富の増進の上に如何に絶大なる威力を有してゐるかを最も明かに物語つてゐることを知ることが出来るであらう。

三 銀行の利用にはこの準備から

商賣をやるものが必要にして有力なる資本の欠乏を補填するには、如何しても、この絶大無限なる信用の威力にまたなくてはならない。資金をほかから仰ぐことすなはち信用の力である。然らば、銀行業者、その他一般の投資家が資本を投ずるに當り、何を標準としてその信用程度に價値づけるかといふに、それには三つの重大要素がふくまれてゐる。

その第一は、その商賣をやる人の人格及び品性である。その人が假令事業を經營するに非凡の才能を有し、熟練の技能を有するも、若しその人格品性に欠點があり、不正を行ひて毫も恥ぢざる如き人ならんか、その經營に成功しても、借入資金を満足に返済するや否やは大に疑はしくなつて来る。それ故かゝる人々に對しては、一般投資家の信用は甚だ淺薄である。

次にその人物の人格には何等の缺點なきも若し其の人の經營の才能技術が低劣ならんかかゝる人は其の事業の經營に成功して、資金の増殖を實現する機會は甚だ少いだらう。然らばかゝる人々に對して、一般投資家の信用が甚だ薄弱なることは素より理の當然であらう。

第三にはその人の資力の如何である。その人が多額の物質的資本を有する場合には、その返済力はそれ丈大きい譯であるから斯る人々に對して信用基礎の強固なることは、茲に多言を弄するまでもないことである。

然しながら、既に資本に缺乏せる商賣人が信用の力により他より資金の調達を計らんとするには、是非とも信用の人格的基礎、及び才能的要素を益々確實にして、信用を高め信用を持するところが最も肝腎である。

「信用は無形の資本なり」といふは即ちこの意味で、資本に缺乏せるものは、すなはちこの無形の資本によりてこれを補ふ心掛が甚だ必要なのである。

四 銀行利用は商賣繁昌の基

金持ちの資本家が、持ち金を出して道樂半分に商賣をやるとするなれば、別に銀行などと特殊の關係を作る必要はない。儲けた金は金庫に仕舞ひ込んで置き、不安を生じたら持ち金をくり出せば良いやうなものであるが、少くとも現代に繁昌しやうとする商店なれば、資金の有無如何に拘らず、どうしても銀行と親密になり、銀行に接近し銀行を利用しなければ嘘である。單に銀行を利用しろといふと或は語弊があるかも知れぬが、商賣の繁昌と銀行とは切つても切れぬ縁があり、銀行を離れて商賣の繁昌はないと言つても強ち過言ではない。

銀行も又た確實なる商店の繁昌がなければ繁昌することが出来ない譯でもある。第一に商店としては如何なる大商店と雖も、資金の融通をなさぬ處はあるまい、資金はむしろ巧妙に融通して

商賣を繁昌さすものが手腕ある商人とも言はれるのだから大きな商店を経営し大に繁榮しやうとする商店ほど、銀行と密接な関係が必要となつて来る。

然らば商店としては、如何にしたならば銀行と親密になれるかといふに、これは銀行に對して商賣の状態を掛け距てなく通報することである。銀行に對して別に秘密はなく何事も知らせるやうにすると、銀行はその商人の状況を詳にしてゐるから、他の秘密につゝまれてゐるものよりは信用をする。故に貸出しでも思ひ切つて便宜を圖ることになり、商店は銀行から思はぬ便利を得ることがあるが、餘り商店の營業状態を秘密にしてゐると、商店に對して銀行は警戒をするから商店にとつても種々と不利益な場合がある。それから商取引が始めて成立する場合などは、商店の信用は取引銀行に照會して来るものが多い。

五 ブローカー銀行の利用法

わが國の商人は銀行には餘り照會しないやうであるが、外國では商店の信用程度は大抵は銀行

に照會して来る。現に外國の商人からは、本邦商店の信用程度を銀行に照會して来るものが多いが、わが國の商店では商店經營上の考課表などは、他に見せないことにしてあるから、銀行でも確實なる返答が出来ず、それかといふて根據のない無責任なることも言へず、風説を基礎として回答する有様であるが、商店としては銀行に内容を知らせて居ないために徹底しない報告をされる場合がないと限らぬから商店は取引銀行にはなるべく詳細なる内容をも知らせ置く必要がある。信用調査には夫々専門の機關もあるけれど、外國にては取引銀行につき調査するのが、一番信頼するにたるものとされてゐる。

商店の内容を銀行に知らして置くことは、資金の融通をうくる場合からしても、商店の信用を確實にする點からしても、必要であり且つ注意を要するものである。

この頃はブローカー銀行が發達して來たけれど我が商人は未だこれを利用して居らぬ様である東京にも大阪にもブローカー銀行は、次第に發達して來たけれど、ブローカー銀行の業務は殆んどコールマネーであつて、商店自身が手形の割引等を利用して居らぬ。長期の預金であれば、ブローカー銀行を利用する必要はなく、最初から大銀行に預託するのが有利であるけれども手形の

割引とか短期の融通であつたならば、ブローカー銀行を利用する方が有利である。英國の商人などは手形の割引をなすために、さかんにブローカー銀行を利用して居りその成績は益々良好である、我が國では未だ發達の行程にあるからブローカー銀行などは將來に俟つべきだが、商人としては銀行を利用することの巧拙により、繁昌の程度をも略々測定し得る位、密接の關係があるものだから盛んに銀行を利用するがよろしい。

六 低利資金の運用法

ブローカー銀行は定期から見れば金利も安いけれども、手形を多く取扱ふ商店は、その手形を忽ち割引することが出来るから商店としては非常に便利な機關である。ブローカーを利用することは東京の商人に多く發達してゐるやうである。大阪では大銀行が殆どブローカーのやうな仕事までするので、すべてが大銀行に吸集されてゐるやうな傾向もある。

大阪で一二を争ふ某大商店などは、まったく某銀行と關係が密接であるため成功してゐると言はれてゐる。最も商店の繁昌すると否とは忽ち銀行の繁榮如何に關係するので銀行でも充分に力を入れてゐる。要するに商店として銀行に商店の内容を知らせて置くのが有利である。今日と雖も別に秘密にしてゐるといふ譯ではないが、商人は今一層銀行に接近し、銀行を利用すべきであると思ふ。

低利の資金を融通しやうとすれば、特に自分の商店の内容を銀行に打明け、銀行から特別の諒解の下に特殊に便宜を得なければならぬのである。

由來我が國の商賣人は、賣上増進とか顧客吸收とかいふ經營の積極的方面には非常に熱心であるが、費用を節約すると會計を整理するとか、或は低利の資金を巧みに運用するとかいふ消極的の繁昌策には極めて冷淡である。併しながら眞に商賣の繁昌を計らうとするには、單に進んで取るばかりで行かずこれを完全に收獲する經營法を大に必要とするのである。

同じく客足を呼び、同じく賣行のよい商店でも低利の資金で經營する商店は、資金に高い利息を拂はねばならぬ商店より、はるかに利益を増收し得ることが出来るのである。

七 銀行から金を借りる人の爲に

勸業銀行總裁梶原伸治氏が、新借金術について大要左の如く語つてゐる。

鬼の催促は盆と暮れに忙しい。特に節季不景氣になると借金難の聲を耳にする。借金はよろしくない。然し、或對から見れば借金は悪いことではない。大に借金するがよろしい。

私達銀行業者は、實は貸したくて貸し度くてうづく／＼してゐるのである。

借りて利用する者がなければ金を貯へてゐても何とも仕方がない。事業を起す爲めに、借金をするのは當然のことである。これによつてその人は有利の事業を営むことを得る。

債主も利得を収める。社會も益する。生産的の事業を計畫して利益のあがることが明白なれば如何に多くの借金を負ふも差支へない。國家について見ても、個人に就いて見ても經營する事業の大になれば大になる程借金の額も多くなる。この意味に於て借金をすることは悪くない。大に借金をするのがよろしい。私達も出來得る限り御便宜を計る。

世の中には贅澤をする爲に借金をする人がある。紳士風を吹かし贅澤三昧の暮しをするのも或る點では廣告の用を足して事業を益することがあるが結局はマイナスである。

單に一身の虚榮心を満足するばかりに借金するものは落第である。生活に窮するが爲に借金をするに至つては全然問題にならぬのである。借りて喰へば空しく消耗するのみで返済愈々困難になる。借金をしなければ喰へて行けない者は甚だ不甲斐ない人間で、如何に立派な擔保を提供しようとも私共にとつては餘り有難くない御客様である。借金はよくない。斷じて借金をする勿れといふのはかゝる借金、即ち贅澤の爲とか生活の爲に借金をする勿れといふ意味である。

八 銀行から金を借りる資格

借金をするには、借金をする資格、いはゞ借金格といつたやうなものが大切である。勿論、擔保といふことも重要なことで、正直な話、我々は契約に際し、眞先に擔保が確實か否かを調査する。然し長く取引を繼續し、或る場合には擔保なしでも貸出しをして、大にその事業を援助しよ

うとする位の信頼を銀行業者に抱かしむるのは、擔保の有名よりも人物の如何である。借金をする資格として第一眞實でなければならぬ。第二確實に約束を實行する人物でなければならぬ。

日本人は商業道徳を重んじない。ゴマ化し根性が強いといふ嘆聲をしばしばきく。私も多年の経験より、遺憾ながらかゝる事實を認めざるを得ない。信實が足りない。信用を重んじない。時の金の融通するためにベンチャラ八百を並べ、後は野となれ山となれ、銀行に不安と困難をかけて、平然としてゐる人物は現在でも少くない、かゝる徒輩が横行する爲めに銀行業者も遂に人を見たら泥棒と思へる態度でのぞみ、眞剣なる事業家が甚だ迷惑することになる。

九 腕や頭の人よりも人格の人

由來、日本は東洋の君子國と稱せられてゐる。私は私が君子國の人であることを誇りを持つ、日本の過去に對して誇りを持ち、現在に對して誇りを持ち、將來に對して確信を持つ、蕞爾

たる一島國が柄不相應の負人氣を出して、兎も角世界列強の仲間位にしてゐるのは偉いものではないか。然しながら一度、我國人の商業道徳如何を考察する時は失望を禁じ得ない。君子國の名前に對して赤面せざるを得ない。

昔は、斯うでもなかつたやうである古い借金證文を見ると「若し返済せざる節は門口へ來てお笑ひ下されても差支なく」云々とある。斯様な道徳的擔保で貸借關係が契約せられた當時の純朴なる氣風が羨ましい。

現今、こんな條件で貸し出しをすれば、銀行は一堪りもなく破産してしまふ。澆季の嘆は何時の世でもあることで、私はこれを以て、直ちに現代が昔よりも墮落してゐると斷定する譯でない。取引が廣くなつて誰とも彼とも貸借關係を結ぶやうになつたから、不徳義な人間警戒に値ひする人物が比較的多く輩出されるやうになつたのであらう。

ともかく金を貸す方にとつては、約束を履行しない怪しげな人物は特に鬼門である。従つて借金をする際には腕の人であるより才の人であるよりも、何よりも先に、信用を重んずるシツカリした人物であることの事實及印象を債主に與ふるやうにとめなければならぬ。

一〇 商賣の内容を確認する説明の力

借金額の第三として努力するを要する。幾ら人間が好くても働きがなくては仕方がない。常に懸命に活動してゐるといふ事實は事業の成否よりも債主に好感を與ふるものである。あくまで努力してゐるのだから、もつと援助しようといふ氣分を起させるものである。

以上の如く信實であり、約束を重んじ、努力さへすれば、借金の無形的擔保として十二分である。何事にもオベンチャラ八百よりも一の事業を示した方がよろしい。レコードを示したがよろしい。約束を實行しますといふ言葉よりも、過去に於て約束を重んじた事實を提示した方が百倍、千倍の利目がある。努力してゐますと辯解するよりも、これだけ仕事が出来ましたといふレコードを示した方がどの位、有效だか判らない。

凡て人を信頼させるには、信頼させるに足るだけの事業を用意してかゝらねばならぬ。レコードを作つて置かなければならぬ。借金のみに限らない。凡ての事業を計畫するのにもさうである。

萬事は自己を充實し借金額を建設するより外に仕方がない。

ウイリアム・ブースは「一年は猶三百六十五頁の書を著すが如し、宜しく新約聖書的一書を著すべきである」と云つたが、一年は猶三百六十五のレコードを作るやうなものである。よろしく借金が樂々と立派なレコードを作るべきである。

これを外にして、新借金術はない。新詐偽術は或はあるかも知れない。

一一 銀行の利用にも宣傳が必要

私は以上の如く極力、事實を示せレコードを作れと云つた。そして、オベンチャラ八百、口先専門を排斥した。然しながらこれは説明の技能、即ち、自分の實質を十分に表現する辯舌や文筆の力を輕視する意味では勿論ない。否、世の中が複雑となり、多忙となるにつれて、筆と口の力は益々重要な地位を占めてくる。借金をする場合に於ても、説明の巧妙は非常に影響するものである。

現代は廣告宣傳の世の中である。實質が同一ならば、その商品の賣行は投ぜられたる廣告費に比例する。本來ならば我々は一々實物を點検して、購買を決定するのが萬全の策であるが、ソウするにも餘りに世の中が忙しすぎる。そこでドウしても宣傳の巧なもの、廣告の鮮かなものが勝利を占める。

人事でも同じである。黙々として引込んでゐたのでは英才も空しく朽ちる處れがある。宜しく活動して英才たるコレードを示すがよい。

借金をする際にもソウである。我々は多數の人々と取引してゐる爲に、忙しくて、細い所までには、手が廻り切れないことである。身許も擔保も出來得る限り調査はするが、充分といふ譯には參らない。

そこで甲乙の相當擔保を有する紳士があつて甲は自己の所有資産に就いて十二分に説明の技能を有し乙は説明が十分でないとすれば、我々の立場としても甲の紳士と先きに契約を結ぶやうな具合になる。斯様な次第で、忙しくなるにつれて借金の際にもある意味に於ける廣告宣傳の力は益々重大になつてくる。そこで説明の技能といふことは新借金術にとつて特に缺くべからざる

要素となる。たゞこれを徒に口舌を弄することゝ、感違ひしないやうにくれぐれも注意して貰ひたい。

第八篇 金を借りて信用を得る呼吸

一 商賣のための借金は大にすべし

商人となつた以上は借金を悪いことだと思つてはならない。月給取りが生活費不足のためにする借金は感服出来ぬ。

青年諸君が朋輩から借金をするなど以つての外である。商人にしても、遊蕩贅澤のために借金をするは言語道斷である。けれども、商賣上の借金をするのは當然である。

商人は三百圓の借金でも、それを五百圓にも千圓にも運用するのが上手なのである。そしてその残りの二百圓七百圓は借金である。其借金はなすべき借金である。必要な借金である。してよい借金である。

が其借金の出来るのは其人の信用によるのである。信用出来ない人は借金しようにも先方が貸してくれない。借金の出来るのは信用ある事を裏書してゐるやうなものである。

商賣が、他の利殖法などよりもよく儲かりそして面白い點は、普通の利殖法などでは、單に資

金だけに對する利殖であるが、商賣に於てはさうでなくして、ありだけの資金の上に數倍した、時として數十倍した資金運用を其人の信用一つでやつて行かれるからである。

例へば、五百圓の資金で商賣をしてゐる人は五百圓だけの商品を買つて、それだけから得る利益しか得られないかといふと左様ではない。二千圓の註文をきいても、手附金の二百圓を入れてあとは商賣の有難さ、手形でも支拂つて置いて、それは金が這入つてから落すといふ風にすれば二千圓の商賣立ちどころに出来、二割と見ても四百圓の利益はあるわけである。それ等は全く、信用第一でやつて行けることで、商賣ならではの出来ることではないのである。

二 上手に金を借りるコツ

凡そ、商人は盡くこの行き方でお金儲けをしてゐるのである。されば二三百圓の小資本で大に儲けることも出来るのである。

處でさういふ風に、うまく資金を廻さうと思つたら、借金が上手でなければならぬ。「借金

が上手でたまるものか」といふ事は商人でない人のいふ事で、商人は借金が上手であると共に借金の運用が上手でなければならぬ。

借金が上手といふことは、矢鱈に借り散らす事をいふのではない。そんなのは却つて借金が下手なのであり、借金したものをホツて置いて、そして、洒々としてゐるのをいふのではない。そんなのも借金が下手なのである。

借金が上手といふのは、借金がどしどし出来る程の信用を作れといふことである。今其信用の作り方の一例をのべて讀者諸君の御参考に供して見よう。

甲野が乙山のところへ借金をたのみに行く「三百圓、八月三十日まで貸して頂きたい」そして借りたとする。處が甲野はその期日に三百圓の金が出来ない。そのとき、大抵の人なら黙つてほつて置くか、延期を申出でるかするか、それをしたのでは借金は下手なのである。そのとき、甲野はさらに丙川にたのんで

「九月三十日までにお返しますから三百圓貸して下さい」といふ。そして借りてくるその金を八月三十日に乙山へ返すのである。

すると九月三十日に返す金はどうするかといふと、その期日までにまた乙山の處に出かけ行つて、

「五百圓程貸して頂きたい。十月三十日に御返しする」

乙山は既に甲野のキチンとした支拂振りに對して、十分の信用を置いてゐるから大に喜んで貸してくれるのである。それで三百圓返せば尙二百圓の金が商賣に利用出来る。十月三十日にはさらにまた丙川から五百圓借りられるのである。

三 巧みに借金を返済するやり方

これはホンの例へ話しをしたまでのことであつたりキチンく返して行けば、相手は次から次へと貸してくれるものであることを説明したのである。

この行き方で、取引先に對することも出来る。

有力な取引先の三軒五軒からかういふ風に信用され、どしどし商品を供給して貰へば、一軒あ

たり三百圓づゝとして、千圓や千五百圓の商品は融通して貰へる。

また、この行き方で銀行に對することも出来る。手形の割引小切手の利用、さういふことで、資金以上に五百圓でも千圓でも千五百圓でも利用することが出来るのである。

親戚友人達から信用されて金を引出し銀行から借り、問屋から借りして行けば、小資本で始めてもかなりの資金が手元にあつまる。

要するにキチン／＼支拂ふ事によつて信用を増して行くことが出来るのである。

資金を倍にも三倍にも五倍にもはたらかせることが出来るのである。

借金の時は余談を抜きにして「實は金を貸して頂きたい」ために來たことを最初の會見に於て卒直にのべる。決して婉曲な口どき落しをやつてはならない。

金額と返済期日もそのとき明白にいふて相手からつゝこまれぬさきに相手の機先を制してしまふことが必要である。

相手から弱味を見られたりスキをねらはれたりしては、到底借金などは出来るものではない。借金は氣合である。

それから不景氣なかつこうしてはならない、出来る丈元氣よく、勇んでやらなくてはならない人間といふものは妙なもので悄然として借金を申込まれたのでは何かしら不安を感じ金を借すのを躊躇する。不安を感じる。

借金は同情に訴へてもとめるものではない。あくまでも利益打算——明確な數字の上に立つた態度で、グイ／＼と相手を追迫して行く程でなくてはならない。

成程、これ位の勇氣とそして熱心と信念があれば、まさか返さなかつたり、仆してしまふやうなことがあるまいと、相手は信じてくれるのである。

不正不徳があつてはならないことはいふまでもない。

四 金を借りる時の注意

假令借金するのが目的で他家を訪れたりとも時機を見て談す必要がある。對手が不機嫌なる時は唯八方山の話に紛らし借金上の事は決して話すべからず。縦や其談をしたとて到底金の借

れる事はなく却つて先方の感情を害するのみ。其家を訪づれ貸し主の外出なさんと成せる折り又他に來客等のありて多忙を極め居る時には長居無用其事件は必ず他日に譲づるべし。是れ無論先方の顔色及び鼻息を窺ふ事なれども決して媚びるの意味に有らず、即ち先方の不機嫌を好感情に誘はんとし若しくは彼の多忙を妨害すまいと言ふ心より恚る行動に出るのである。是れ獨り貸借上に於ける時の注意なるのみならず、又社交上にも最も必要なる條件である。對手が不機嫌なる時管らぬ事を喋れば喋る程彼をして悪感情の地位に導く又先方が多忙を極め居る際などに餘計な駄言蛇足八百長的の雑談をなすは「氣の利かぬ人だ」と断定せられて排斥せらるゝであらう。火急を要する場合は言へ先方の顔色及び鼻息を窺ふにあらざれば其目的の成就せざるのみか其身をして一層不利の地位に置くが故に注意しなければならぬ。

五 借用證文の書き方の注意

證文が物を云ふ世の中だが、金の貸借をすれば第一に起る問題は證書である。此證書にいらぬ

文句を並べたがるのが法律の心得なき者の癖である。曰く「一金何圓也」と書いて、其次に「右の金子拙者今般無據入用に付借用受取候事實證也」と書く、據ん所なしも、あるも、拙者、今般、受取、悉く贅字である。唯單に「右借用候也」で澤山である。次に返済期限の段へ行つて「然る上は返済の儀は來る何年何月何日限り元利共無相違取揃へ屹度辨濟可仕候也」と書く。牛の涎のだらく、不要文句澤山なるにあきれる。「來る何年何月何日限り元利同時に返済可仕候也」で結構、更に簡單に「返済期限は何年何月何日とす」でも法律上借用證文としての効果は充分である。

六 預ケ金の取引の一斑

預ケ金

預ケ金は二ツに分けて、銀行預金と郵便預金とするが説明上便宜で、更に之は左の如く分類す

ることが出来る。

銀行預金		1	當座預金
		2	定期預金
		3	特別當座預金
		4	通知預金
		5	預金手形預金
		6	別段預金
		7	貯蓄預金
郵便預金		1	普通の郵便貯金
		2	規約貯金
		3	据置貯金
		4	共同貯金
		5	海外貯金

各種別について詳細に述べたいのであるが、そうなると反つて煩雑になり讀者諸君に對して有難迷惑になり、且つ専門に傾く恐れがあるから、茲に於ては會計整理上に必要な丈の預金の説明を極めて簡単に述べることとする。

第一 當座預金

當座預金とは、預金主が何時にても自由に引出し得る預金で、其引出には自ら銀行に行きて請求しないでも、現金支拂の必要が起つたとき、銀行に宛てた支拂命令書を作成して、之を受取人に渡すので、受取人は其銀行に行きて現金と引替へるか、又は自分の取引銀行に預入れて銀行に取立てしめる。此支拂命令書を小切手といふ。そして預金主が現金の入用の際にも、矢張り小切手を振出して銀行から引出すので、當座預金の引出には必ず小切手を用ふるのである。

當座預金に預入れたるときは
 (借方) 當座預金 (資産の増加) — 圓
 (貸方) 現金 (資産の減少) — 圓

で若し現金で預入れない際は其他の科目が貸方となり、次に其引出し即ち小切手を振出した際は

(借方) 現金又は其他の科目——圓

(貸方) 當座預金(資産の減少)——圓

となる。即ち當座預金の預入れは借方で其引出は貸方である。

當座預金の利息は一年二期に計算して其預金中に繰入れられる。六月一日より十一月三十日迄の分は十二月十日頃に預金に繰入れ、十二月一日より翌年五月三十一日迄の分は六月十日頃に預金に振替へられるが普通である。故に銀行にて預金に繰入れたる日、換言すれば、當座預金通帳へ利息を記入したる日、左の仕譯記帳をせねばならぬ。

(借方) 當座預金(資産の増加)——圓

(貸方) 利息収入(利益の増加)——圓

當座預金は商人に最も多く利用され、商人として銀行と當座取引のない者は少い。銀行側より謂ふときは、何時引出されるか知れない、且つ一番手数の掛る預金であるから、利息は各種の預金中最も安く、大銀行にては無利子の所さへある。併し商人側より觀るときは、最も便利な預金

であつて、(1)日常、幾回となく受拂する現金(及び他より受入れた小切手)などの上に大いに手数を省き得ること、(2)銀行の責任ある保護に委する故、盜難が失等の恐れなく、(3)、利子をも收入し得ること、(4)、信用のある銀行と當座取引することは、自分の信用を保證する利益あること(5)、銀行を利用して新しい良い取引先を紹介せられ、(6)、其他代金取立を依頼するにも、貸付や割引に依つて資金を融通して貰ふ上にも、大いに便宜がある。

當座預金の出納(領入れ及び引出し)の明細を知る爲めには、當座預金出納帳を設ける。丁度現金の收支に現金出納帳を用ひたと同じ様なものである。而して二銀行以上と當座取引を結んで居る場合には、一銀行毎に別に記帳せねばならぬ。斯くせねば各銀行毎の預金關係が解らぬからである。そして當座預金出納帳の記帳法は別に示すこととする。

次に當座預金勘定は又の名を銀行勘定とも呼ぶ。そして二銀行以上と取引のある場合には、各銀行毎に當座預金勘定を設ける爲めに、銀行の名を以て勘定科目とすることもあるが、併し各銀行毎の預金關係は當座預金出納帳で明瞭にすれば宜いから、元帳面の勘定科目も斯く一銀行毎に起す必要はない。此際にも矢張り當座預金勘定又は銀行勘定として一勘定を以て整理すれば、全

體の當座預金が何程であるかとの、當座預金の總高を知り得るといふ利益もある。

第二定期預金

定期預金は預入れの期間を前以て定めて置き、其期間の終了後に引出す約束の預金である。若し預金の都合で中途に引出すには、銀行の承諾を得るので、而も利息は約定以下に（普通には當座預金の利息並）引下けられる。故に銀行は其期間中は安心して資金を融通し得るから、利息は各種預金中にて最も高い。期間は三月、六月、一年を普通とする。餘りに短期間なるときは充分に有利に運用すること難く、又一年を超える様な長期のものは、金融の前途を見越すことが困難であるから、斯様な期間の定め方をするのである。此預金は商人が營業閑散にて遊金に困る際の利殖法として利用される外に、社會の一般も銀行預金中最も有利なものとして歓迎されて居る。

- (1) 現金にて預入れたとき
(借方) 定期預金(資産の増加) —— 圓

- (貸方) 現金(資産の減少) —— 圓
- (2) 當座預金を定期預金に預け換へたとき
(借方) 定期預金(資産の増加) —— 圓
(貸方) 當座預金(資産の減少) —— 圓
- (3) 定期預金を當座預金に振替へたとき
(借方) 當座預金(資産の増加) —— 圓
(貸方) 定期預金(資産の減少) —— 圓
- (4) 期日に至り利子五十圓と共に元金五百圓を現金にて受取りたるとき
(借方) 現金(資産の増加) 五五〇圓
(貸方) 定期預金(資産の減少) 五〇〇圓
利息收入(資産の増加) 五〇圓
- (5) 若し元利金を其儘引繼ぎ定期預金としたときは、4の仕譯に於ける現金勘定が定期預金勘定となる。

(6) 若し之を當座預金としたときは、4の仕譯に於ける現金勘定が當座預金勘定となる。
扱て定期預金の如く中途に出入れのないものに就きては、當座預金の如く別に出納帳を設ける必要はない。此事は次に述べる通知預金や預金手形預金などにつきても同様である。元帳に一定を設けて整理すれば、借方は預入れで、貸方は引出しであるから、明細帳を別に設けずとも充分に用は足りるのである。

第三 特別當座預金

一名小口當座預金とも謂ひ、當座預金と同様に、預入れ引出し共に何時にても自由であるが、其引出しには小切手を用ひないで、預入れ引出し共に通帳(小口當座預金通帳)に記入して貰ふのである。此預金は小切手を使用しないから、日々頻繁に受拂をする商人には不適當であるが、小賣商人又は商業に關係なき一般人が、一時の遊金を蓄ふるには適當である。利息は前記兩預金の中間に在る。

會計整理は當座預金に倣つて、假令數銀行に小口當座預金をするとも、元帳面は一勘定にて整

理し、小口當座預金出納帳を以て各銀行毎に預金關係を明かにするが宜い。仕譯記帳法や小口當座預金出納帳の記帳法は、總て當座預金に倣へば宜いのである。

第四 其他の銀行預金

(一) 通知預金 とは引出を爲す三日乃至七日位前に前以て引出の日を通知して置き、其の日に引出す預金をいふ。一般に商人には適しない、只支拂を豫想し又は延期し得る場合か、或は當座預金及び小口當座金よりも少し許り利息の割合がよいから、之等の預金が餘り多額になつたとき一時の利殖法として、等に利用されるのみである。

(二) 預金手形預金 とは極めて短期間の遊金を一時預けするもので、何時にても預金主又は其指圖人へ、預金を支拂ふ約束の「預金手形」といふ證書を發行する故此名があるのである。

(三) 別段預金 とは以上述べた以外の特殊の預金をいふので、行員の身許保證金、代金取立濟の一時預り金等であつて別に別段預金といふ名前の預金がある譯ではないが、銀行の會計整理上の一時的の預り金を假りに整理する際に用ふる勘定科目である。

(四)貯蓄預金 は普通銀行では取扱はない。普通銀行は一口の預入高を十圓以上と法律で制限されてあるので、零細の資金を扱つて國民に貯蓄させよう爲めに設けられた特殊の銀行が貯蓄銀行である。

第五 振替貯金

振替貯金は左の事柄を取扱ふのであるから、卸商や問屋業にも使用されるが小口現金の受拂に便宜である爲めに、小賣商人に最も利用される。

- 1、振替貯金の加入者又は加入者以外の者より、其加入者の口座へ振込を受入れること。
- 2、加入者の請求によつて、他の加入者の口座へ貯金の振替受拂を爲すこと。
- 3、加入者の請求に依つて、自身又は他の加入者又は加入者以外の者に現金にて貯金の拂渡を爲すこと。

之等の取扱につきての詳細について理窟をつけて八釜しく説明して行くと、また餘りに長くなるので茲には會計整理法につきて簡単に述べることとする。

1、基本預金(十圓と定つて居る)を預入れて振替貯金に加入したとき

(借方) 振替貯金(資産の増加) —— 圓

(貸方) 現金(資産の減少) —— 圓

また他より振込を受けたとき(貸方科目は振込を受けた原因に相當する勘定科目を記入する。例へば得意先より掛貸金の送金を受けたときは得意先勘定とする如きである)

(借方) 振替貯金(資産の増加) —— 圓

(貸方) 相當科目(……) —— 圓

3、現金にて引出したとき

(借方) 現金(資産の増加) —— 圓

(貸方) 振替貯金(資産の減少) —— 圓

4、現金引出の爲め拂出書を相手方に渡したとき(借方科目は支拂の原因に相當する勘定科目とする)

(借方) 仕入先(買掛金を支拂つたとき) —— 圓

營業資（營業の經費を支拂つたとき）——圓
什器（營業用の什器を買入れ支拂つたとき）——圓

（貸方）振替貯金（資産の減少）——圓

- 5、他の加入者の口座へ貯金の振込を爲したとき……4と同じ。
- 6、利息を預金中に繰込まれたときは、當座預金の場合の記帳法と少しも異なる。而して振替貯金の出納につきては當座預金や小口當座預金と同一様式の帳簿を備へて、其預金關係を明瞭にするが宜い。

第九篇 これから見込ある儲かる商賣

一 活版印刷業

一口に印刷業と云つても、夫れにはいろいろと種別があつて、活版印刷もあれば、石版印刷もあり、又銅版印刷もある。しかし、所謂全くの素人からすぐさま印刷業を開始せんとすれば、仆うしても先づ活版を選ぶの外はない。云ふまでもなく、其の活版印刷と雖も、全然何等の熟練を要しないと云ふのではないが、石版若しくは銅版等の如く、勞力作業よりは寧ろ製版技術を主とする印刷に比すれば、殆んど熟練と云ふ程の熟練なくして、何人も立派に之れをやつて行くことが出来るのである。ところが、素人がイザ開業せんとするに當つて、先づ數ヶ月間最寄の印刷工場に見習ひを爲すか、又は其の頭初に於て、斯業の経験者を聘して仕事の習練を期することはこれ決して無駄事ではない。

過般の大震災に於て、何人も等しく之れを承認したるが如く、印刷及び製版の事業は、必需工業中の最たるものであつて、現今の日常生活には、一日もなくてはならぬ重要さを持つて居る

のである。

これが、すなはち、今回の震災に依つて圖らずも示されたる、總ての印刷及び製版事業の有用にして且つ有望なる證左ではあるが、更に家内工業若しくは内職仕事としても、其の規模の大小如何に拘はらず、印刷業が頗る有望なる理由である。

事實、大は新聞雑誌の印刷から、小は名刺葉書の印刷に至るまで、都市に於ては勿論のこと、地方の農村に於てすら、其の需要は日に増加しつゝあるが故に、注文の集め方と、經營の方策宜しきを得れば、都鄙の何れに於てするも、規模の大小に従つて、それ／＼に必ず印刷事業の成功すべきは疑ひない。されば、其の開業の準備とは如何なるものか、資金の多寡に應じて、次に少しばかり之れを述べてみよう。

印刷業(活版)を開始するには、先づ其の最小限度に於て、如何なる場合も百圓の資金が必要であらう。而して其の設備を以つて印刷をなし得る程度のもものは、主として簡單なる名刺若しくは葉書等の類である。故に、之れは未だ獨立して一家の成業とまでは行かぬが、地方の繪葉書店、或ひは文房具店の片手間として、店番ついでの兼業をするか、又は大道などに立つて、所謂輕便

印刷屋をなすには至極適當である。

さて、此れに要する印刷機械は、最低にして三四十圓のものもあるが、美濃版四つ切にして價格六十圓位の輕便機を選ぶのが最もよいであらう。勿論其の附屬品もそれは必要であるが、斯くの如き程度の機械に於ては、餘りに其の多きを要しない。更に活字も名刺印刷のみの場合は、姓名用として三號を用ひ、住所用として六號を用ふれば、大體千五百種の漢字を三號、六號の二様に備ふれば充分である。而して、其の價格は三號が一箇一錢五厘で、六號が一箇五厘の割であるから、多少の豫備を加へて購入するも、全額三十五圓以上には出でない。しかし、前述の機械附屬品及びインキ代にも約二十圓は充當しなければならぬので、活字販賣所のある都市などに於ては、所要の都度少し宛其の活字を購入すれば、百圓の資金を以つて、優に活版印刷業を開始することが出来るのである。

更に一段と進んで、五百圓の資金を之れに投ずれば、稍々完備した印刷業を開始し得て、勉強次第では、なほ如何様にも發展することが出来る。

借此の場合は、先づ美濃版半切の手押機械を購入するのが適當であらう、其の價格は普通百二十圓見當である。其他云ふまでもなく、いろいろの附屬品も此れに伴つて多少増加するが、活字の種類及び其の號數は更に一層増加しなければならぬ。

斯くて、五百圓全額を其の準備に使用すれば、名刺、葉書等は勿論のこと、廣告のチラシや、簡單たる案内状をも立派に印刷し得るから、家内工業として相當に利益を擧げて行くことが出来る。而して、この程度の印刷業に於ては、營業費を要することが比較的僅かであるが、注文の集め方には最も困難を感じなければならぬと云ふ。故に奮闘的活動をする決心にあらば、此種の印刷業から打つて出ることが何人にも手頃であらうと思ふ。

印刷業のみに限らず、他の如何なる事業に於ても、先づ千圓の資金を有すれば、其の開業は餘程に樂となつて来るものである。手引用半紙二枚刷機械、若しくは足踏用新聞一頁刷機械は、此の場合最も恰好なる印刷機であつて、最近の値段表に依る其の價格は、前者が約三百圓内外、後者が凡そ五六圓見當である。なほ、附屬設備として可なりの費用を要するも、其の殘餘を以つて、豊富に活字の購入をなすことが出来る。従つて、其の印刷物の程度も著しく進んで、普通の案内書や、報告書等を始めとし、種々なるパンフレット類をも容易に印行し得るのである。故

に、其の注文取りの活躍如何に依つては、職工二三名を日常使用しても尙且つ、優に多額の純利益を収め得て、漸次に其の規模を擴張して行くことが出来る。

五千圓は少し大き過ぎるが、普通に最も完備した印刷業を開始せんとすれば、是非ともこれだけの資金が必要である尤もこの程度の規模に於ては、手引若しくは足踏用の印刷機を數臺設置して、小さな印刷物を數多く引受け得るも、更に動力用菊判八頁刷位の精巧機械を購入して、比較的大物の注文を一纏にして集めることが、經營上より得策であらうと思はる。其の菊判八頁刷動力用印刷機の價格は現在のところ、一臺に付き約千五百圓から二千圓見當である。

さて、右の外、種々なる附属機器及び豊富なる活字購入を要すべきは云ふまでもないが、なほ場合によれば、其の資金の餘裕を以て、罫線機械、製本機械、斷裁機械等をも充分に設備して、其の印刷に附帶する各種の事業を兼營することが出来る。従つて、其の収入利益の増加を來すべきは勿論である。

斯くの如く、五千圓の資金を投ずれば、最初から地方に於ては大印刷屋の部に入り、東京大阪の如き都市に於ても、普通の印刷店として、なほよく中以上の地位を占め得るが故に、これは、

家内工業には稍大なるものであつて、少なくとも五六名の職工を外より雇用しなければならぬのである。而して、其の事業の成功、不成功は、主に經營者の經營的手腕を有するか否やに懸るのである。

以上の如く百圓の資本、五百圓の資本、千圓の資本、五千圓の資本などと、其の資金の多寡に應じて、其の開業準備並に引受け得る印刷物の程度を、極く概略的に述べ來つたのであるが、經營上最も重要にして、而も夥しく困難の伴ふものは、其の注文の集め方である。

尤もこのことは、資本金が百圓若しくは五百圓程度の小印刷業に於ては、受動的に經過し得るのであるが、其の規模が漸次擴大すれば、其れに應じて發動的に外交員の活躍を要するのである。

ところで、前述したるが如く、極く小規模の印刷業ならば、獨立せずとも、洋紙店、文房具店、繪葉書店等の片手間に兼營することが、注文を集め歩くの勞を省き得るとともに、自店の商品をもより多く賣捌くことが出来るのである。なほ平内職として之れをなす場合は、或ひは一運送店と特約して其の荷札のみを印刷するか、或ひは一商店と特約して其の封筒のみを印刷すること

と等が、間斷なく、而も比較的に勞少くして、多量の仕事を繼續し得る良策である。

二 名刺印刷専門店

今日は何んな商賣を始めても、五百圓や千圓の資本がなくては、商賣に取り附けない世の中となつて来たが、資本の運用さへ旨ければ、僅か百圓二百圓の金でも、優に商賣を始めて、而も其の生み出した利益で一家四五人の家族は、樂に生活して行かれる事がある。そして夫れが鼻緒の軸などをひねくるやうな、下卑た商賣でなく、極く品の宜い、別に商賣上の掛引や、お世辭を云ふの必要がない。極めて樂な商賣であるから面白いではないか、と云つたばかりでは解らないが、遣り方一つで百五十圓あれば、優に名刺印刷所が出来るのである。

名刺印刷所と云へば、今日如何な人でも、名刺を使用しない者はないだけ、夫れだけ、仕事の性質は誰れにでも解つて居るが、さて之れでも普通の名刺屋を始めるとなると、百圓、二百圓では鳥渡始めにくい、夫れは普通に大袈裟に始めるからで、之れを變つた經營法でやつて行けい

百五十圓の資本があれば澤山である。

夫れは活字の買入れを非常に節減するのである。譬へば、普通の名刺屋を開くには、少くとも三千字位は要る。夫れも三號、四號五號六號七號と電話番号のゴジツクと、平假名片假名とは、何うしても要るのであるから、之れを能く『利字』を研究して、名刺に最も必要なる三號四號文字に重きを置いて、極めて經濟的に設計しても、三號四號だけが、先づ一萬二千本位は要る。そして三號一字一錢五厘四號一字一錢位であるから、之れを半數宛と見ても、三號活字代九十圓、四號活字代六十圓で、其他に込物、五號六號七號、ゴジツクインテル、約物などを入れると、矢張り、二百四五十圓の活字代が要るし、其他に機械附屬品を入れると、何うしても五百圓以上の資本が費ることとなるのである。

然るに新經營法は、斯うした活字の買入れをしないうで從來とは全く別な經營法をするのである。夫れは活字は、成るべく減せるだけ減すと云ふ方針を取るものである。で其土地の電話帳を索引して、先づ尤も有り觸れた姓名だけを買入れるのだ。即ち東京附近で云へば、『佐藤』『齋藤』『中村』『井上』と云ふやうな姓と『義雄』『俊夫』『正』『金』『太郎』『男』などの名前に多い文字を集め、夫れ

に町名の六號字、其他始終使用する文字だけを集めるのだ。之れを極く綿密に精査すると、全部で四千本もあれば澤山である。で此活字代が三號千本十五圓、五號千本十圓、六號千本五圓、其他込物なども極く少く十圓位とする。と活字代が合計四十圓計りとなる。夫れへケース五枚位で後とは極く簡單に、ケース代一箇と、硝子棚を作つて、之れがケース約七圓五十錢硝子二十圓ケース臺十圓位で合計三十二圓五十錢、二口合計七十七圓五十錢となるが之れを今一層節約すれば、活字は二十圓でも間に合ふのである。と云ふのは、活字は名刺を引受けて不足を生じた場合は、全部小買にするのである。つまり、三號四號のやうな名刺に必要なだけ、少し買入れて、後とは注文に應じて活字を小買すると云ふ仕込である。で此方法に依れば、活字代は全部で五十圓以上八十圓位で大丈夫出来ることとなる。

三 印刷物の注文勸誘業

諸官衙、學校、役場、會社、商店などへ行つて、印刷物の注文御用を承つて、それを印刷屋

に依頼して、一割乃至二割の口錢を取るのである。活版及石版に多少の知識あるものならば、何も云ふ必要はないが、素人で始めてやらうとするには、即座に客の依頼物を見積ることが出来る故、當初は、その依頼された原稿を借りて来て、印刷屋に見積りをさせた上、それに口錢をかけて見積書を出せばよい。さうしてゐる中には、だんく経験が積むから、直ちに、自分で見積りが出来るやうになる。

精勵して、毎日戸別訪問してゆけば、必ず得意が出来て来ることは勿論だが、一度注文を受け

たならば豫定の期日迄に、必ず納付するやうにする。かう云ふ商賣には、何よりも、固く期日を守ることが大切で、きちんきちんと必ず期日通りに納めるやうにすれば、信用がだんだん増して、引續き新しい注文を貰ふことが出来る。

印刷物によつては、四割から五割にもつづが、なかには、すつと少く、一割五分位のものもあるから、まづ、約そ、二割四分の口錢があるものと見れば間違ひはない。二割五分でも印刷物は金高の嵩むもの故、決して、少い口錢ではない。百圓二百圓の注文はよくあることであるから、常得意が、三四十軒もあれば、一ヶ月の注文受高が千圓位になることはさう困難でない。従つて

二百五十圓ほどの収入となる都合である。

併し、これとても初めから、かううまくゆくものでないから、先づ、暫らくの間は、五六十圓から七八十圓位の月収に甘んじて、只管お得意大事、信用第一と心がけて、働くことが肝要である。さうすれば、やがて前述の如き収入、或ひは、もつと多くの収入を得るやうにもなるであらう。

四 新聞雑誌関係の新商賣

通報員

今曉何時十分、どこそこに火事があつて何戸焼けた、人殺しがあつた、強盗が入つた——恠うした記事が、ネボク眼で床の中で繰り開けるその朝の新聞に載つてゐる。よくも恠う今朝の出来事が、今朝の新聞に出てゐるものだ。新聞記者といふものも樂でない。一人や二人は警察署に

或は消防署にでも泊り込んで居るのだらうかと思ふ。なるほど泊り込んで居るか、でなければ警察の方から、事件が起れば直ぐ知らせて來るのでなければ、恠うまで早く知れ相もないのだが、事實は反對だ。

東京の新聞記者が警察を廻つて事件をとつた例はない、さうかと言って警察の方では、事件を秘密にこそすれ、進んで知らせるやうな事は絶対にない。そんなら何故恠う早く知れる。それが通報員といふ現代の新珍商賣の一つが生れたからである。

東京各區に各々三名乃至七名位の通報員といふものがある。彼等は大概其區内に永年居住して自分の區内の事なら、猪の穴迄知つて居るといつた連中、これが新聞社に渡りを附けて、東京市内十五六を算ふる日刊新聞のうち勘くて三社、多いのは五社も六社分も引受けて、即ちそれ等の新聞社の通報員となり區内の隅々を廻り、警察署を廻つて何か事件があれば、警察の電話で、特約の新聞社三つなり七つなりへ、直ちに急報するのである。

「何處そこにいま火事が起つた」

「何處々々の何番地、何の某の家に強盗が入つた、某は人殺しをした」

これだけで役目は済む、この報を聞いた新聞社では、金と人間と、時間の許す範囲で現場なり関係者なりに就いて、活動を開始する。斯くて最終の締切時間までにはその事件が立派に新聞記事となつて紙面に表はれるのだ。蓋し新しい商賣だらうが、その報酬も一社から十五圓乃至三十圓位を頂戴し、三社か五社を引受けてお役目を済まして居れば、優に月の暮しは立つ。而かも一つの事件を同様に報告すればよいのだから、商賣として決して苦痛の多いものではない。新聞社の方でも、記者一人の月給で、三人分も五人分もの能率が得られるものだから結局兩得といふ事になる。

紙型通信

東京市内に通信社といふものゝ數が、二十社もある。現在ではそれ〴〵分業的になり、各通信社はそれ〴〵特色を有つて、政治方面でもその通信は政友會とか民政黨とか何とかは、他の及ばないものだ。社會部の方面でも何々と、各々他の及ばぬ特色を賣り物とし、その傾向が益々助長されて、既に「千代田通信」の如く宮内省關係記事の優秀を誇り、「婦女通信」のやうに婦人界の

編者を以て任ずると言ふ工合で、これは毎日騰寫版刷りの報道記事を、一回乃至七八回も各新聞社に配達するのだが、最近では「日本電報通信社」が、外國式の電話通信法を始め、各社に特別設置の電話をおき、一つ記事を一時に、同様に各社の電話へ通報出来るやうな式にし、書く手數と配達する時間を除く事を始めたが、これは市内だけの事で、地方へも或は追々そんな施設もされるだらうが、當分まあ見込みはない。

ところが近頃、紙型通信といふものが出來て地方の片田舎の新聞にまでこれが配達される。紙型といふのは御承知でもあらうが、活字及び寫眞版を、紙の型に納めて、この紙型へ鉛を流し込みさへすれば、直ぐに印刷される、即ち活字を拾ふ世話がなく、それを組む手數がはぶけるのだ。地方の新聞に載る講談、小説の類は、つい近年迄は、通信と同様に書いたものを賣る専門の商賣人があつた。そこへ頼めば「猿飛佐助」でも「岩見重太郎」でもお好みの講談や、或は小説が何回分幾らで買へたものである。それがやゝ進歩して活字と挿し繪の木版そのまゝを送るやうになり、更に近頃は紙型に進化したものだ。これ以上進む事は現代の新聞紙では望まれない。何せ拾ふ手間、組み手數が無く、其儘使用されるのだから。ところで紙型通信萬能の時代現出と共に

紙型で其日の出来事の寫眞をも、地方新聞に送るやうになり、例へば今日東京に飛行郵便があつたと云へば、代々木原で飛行機の飛ぶ様子がちやんと寫眞になつて、地方の新聞にも出る事になる活字さへ碌にないやうな田舎の新聞社でも、堂々と立派な英文欄が出来、一流の小説家の小説が載り、立派な學者の名論も其日のうちに讀む事が出来るといふ不思議さが現出されるやうになつたのだ。

切り抜通信

これは全然東京に居て、新聞ならば地方で、なければ雑誌社、或は會社銀行を對手の珍商賣だが、假りに運動の雑誌ならば運動の記事、砂糖の會社なら砂糖關係といふやうに、それ／＼専門々々に對する、各新聞の記事を切り抜いて、その分類分けにして毎日配達する商賣である。會社や銀行、雑誌社といふものが、毎日何十種の新聞を片つ端から讀んで、自分に關係のあるものを調査し、或は統計するのは、専門の人を幾人が雇つたとて容易な仕事ではない。それをこの切り抜き通信社に頼んでおけば、難なく纏まつたものを得ることが出来る。通信社の方でも注

文に應じた種類の記事だけを、切り抜いて、それに何月何日の何新聞と附けてやればよいので、注文が多ければ多しだけ新聞を備へておけばよい、そしてハサミと糊だけで間に合ふ仕事だから調査の必要も書く手間も要らぬ。現代に於いてその考案が實に珍妙を極めた商賣の一つであると云はねばならぬ。

新聞寫眞屋

新聞に寫眞は離れる事の出来ぬ一體のものとなつて來たが、偕て最も敏捷に活動せねばならぬ新聞寫眞班を有つてゐる新聞社は、東京、何十社のうちでも半分位しか無い。何故ならば自分のところに寫眞班を置き、製版所を設けるには多大の金を要し、これを設置した後は又多大の經費がある。その爲に是非必要ではあるが特設する事が躊躇されるのだ。こゝを見込んだのか新聞寫眞屋で、今日何か事件が起きた、誰れそれが外國から歸つた、大臣が今日今處へ發つたといふ場合、その寫眞屋さんは、各社の寫眞班と同様に、そこに行つてパチリ／＼やつて、それを現象して、寫して、直ぐに寫眞班のない新聞社を廻り、注文を取るのだ。恚うして注文をとつた寫眞は

寫眞版に製版して（其儘印刷されるやうに）それ／＼届けるのだが、何せギリ／＼結着の時間仕事でやるのだから、その忙しさつたら又とあるべきものでない。

これが東京でなく地方になると、假りに横濱には、この製版屋が無いから横濱に三つある新聞社には寫眞班もない。そこで横濱には新聞寫眞屋（撮影専門）が生れた。即ち横濱で起つた問題に關する寫眞を撮つて、これを新聞社及び支局に賣るのた、そこで新聞社及び支局は、これを東京の新聞寫眞屋へ送つて、製版して貰つて間に合せるといふ順序になる。時代は進歩すると共に「時」そのものだけが問題の中心となつて来る「時」を最も利用活用しなければならぬ新聞事業に附隨しての商賣は、矢張り「時」の虚き間だけを狙つて行くやうになるのは當り前だ。

原稿運搬屋

つい目と鼻の間ではあるが、東京と横濱では「時」を争ふ新聞事業の上にて、千里の差があると言つて差し支へない。現在横濱には土地の日刊新聞が三社と、東京の各社の支局は、それぞれ「横濱版」或は「神奈川版」なるものを造つて土地の新聞を壓倒しようとして居る。そこでこ

れ等の各支局から、この地方版の記事の原稿を、一本社に送るために、各新聞の締切り時間は大概同じだから、夕刊は何時迄、朝刊は何時迄と決まつてゐる。この原稿の送達をする商賣が生れて何時便、何時便と稱し、自轉車で各支局を訪れ、原稿を纏めて東京へ持つて行くやうになつた。彼れは省線又は汽車を利用して、最も早くこれ等の原稿を東京に運び、各社に配達するのである。

現代の魔王新聞紙が、これ以上何處まで發達するか、既に活字を一字々拾つて組む事はモノタイプ（外字新聞のリノタイプの式をとつて、活字を製造しながら組んで行く器械）の發明によつて、遠からず時間の短縮を生み高速度輪轉機によつて印刷能力が何十倍々加され、これに附隨した商賣も何う變化するか先の事は分らぬが、以上は現在に於ける新聞雜誌に關する新らしくて珍な商賣の尤なるものである。

六 廣告新聞の發行

時事のよろづ案内式の物を、新聞二面に満載して、貸家貸間から地所の賣買、派出婦から求縁失業者の喜ぶ募集廣告を取扱ふとしたらば、資本金の二千圓、有れば結構出来る。

先づ記者と云ふ名義で外交員を出来るだけ集めて他の新聞に度々出す廣告主を訪問して、廣告を勧誘させる。無論一回五行で一圓位として安くする事が、最初は必要である。

支出の方を見て行くのに、印刷屋の活字を組むのが一面分廿圓として裏表二面で四十圓、紙型や鉛版には取らず直ぐに印刷するものとして刷りが一枚三厘と見て、千枚三圓、紙代が一連五圓として、丁度一枚分の大きさに對しては、一連で千枚取れるから一日合計四十八圓と雜費共で六十圓あれば、事務員の二人位使つて行く事が出来るのである。

そうすると十日で六百圓を要するが、其内には外交員が盛んに廣告と廣告費を持込むから後は其れを巧く運轉して行けば良いので、問題は廣告主の勧誘如何に有るから外交員の手當は思切つてよくする事が必要である。

無論外交員は歩合制度で、入金半分は外交員に與へる位にしなければ駄目である。何れにしても外交員は此新聞の生命であると思ふ。

次に經費は一面全部を五行一劃分として計算すると、三百個入る事になる、兩面で六百と云ひ度いが、題字や、多少の記事は入れなければならぬ最大四百個と見たら適當である。

一個分一圓として一日四百圓、内二百圓は外交員の手數料として、二百圓の殘金の内、一日六十圓支出として純益百四十圓と云ふ事になるが、中には廣告料の取れない所も出ようし、割引もせねばならない事もあるから、結局は其半分の七十圓位の利益に一日に間違ひ無く上がる、愈々世間の人から、案内新聞を見ればと云ふ所迄賣れて來れば、廣告料も高く取れるし、外交費も安くしてもよし、其れに第一新聞として一枚幾らかで賣る事も出来るから發行部數を大いに増しても算盤が取れるし且つ社會的にも認められて勢力が付けば後は占めたものである。

七 アドライター

獨立して、アドライターたらんとする者には商店に於ける營業案内の如き一種の職業紹介機關を有せなければならぬ。

商店雑誌の木村久平氏、商店界の清水正己氏、實業界の井關十二郎氏などは、自分の關係する雑誌の上に、廣告文案圖案の引受けを廣告して、多くの依頼者を求めてゐる。

チラシ	七圓	以上	十圓まで	包紙	七圓	以上	十五圓まで
レーベル	五圓	以上	十五圓まで	商品切手	十圓	以上	十五圓まで
カタログ	一頁三圓以上	一頁五圓以上	一頁八圓以上	廣告新聞	一頁十圓以上	二十圓まで	
廣告雑誌	一頁五圓以上	八圓まで		陳列裝飾	二十圓	以上	五十圓まで
包装函	五圓	以上	十圓まで	廣告葉書	五圓	以上	七圓まで
宛名廣告	七圓	以上	十圓まで	新聞廣告	七圓	以上	三十圓まで
雜誌廣告	五圓	以上	十圓まで				

一寸考へると圖案料文案料と云ふものは高いやうですが、下手な圖案家の拵らへたもので利かない廣告をするよりも、上手な専門家の手に依つて、必ず利く廣告をした方が遙かに利巧です。依頼を受けた圖案や文案は採否に拘はらず費用申受けます。いづれも全力を擧げて作つたものですが使用されなかつたとしても努力に對する報酬を頂かないワケに参りません。

- 繪ビラ
- 背景圖案
- 廣告スタンプ
- カタログ表紙
- チラシ意匠
- 看板意匠
- 廣告文句
- 歐文翻譯
- 廣告新聞編輯

などお拵へになる時には商店雜誌編輯部にお頼みなさい御頼みになる時には(一)御希望の條件を書いて下さい(二)料金は出来てからで宜しうムいます(三)料金は極めて少額です即ち

- 繪ビラ(十五圓より三十圓迄)背景圖案(一圓より二圓迄)廣告スタンプ(五十錢より一圓迄)カタログ編輯(一圓より十圓迄)チラシ意匠(一圓より二圓迄)看板意匠(一圓より三圓迄)廣告文句五十錢より一圓迄)歐文翻譯(原稿拜見の上)廣告新聞編輯(相談の上)

まづ此標準で手のかゝらぬものは最低・面倒なものでも此價格以上は頂きません、本當の實費だけです。(四)いつ迄に入用か期日を言つて下さい、必ず期日に間に合はせます。

□キツト氣の利いたものが出来ます□

風の廣告をのせてやつてゐるのである。又商店雜誌、實業界、商店界といふやうな純商店實務研究雜誌に「廣告文案圖案」を引うける

廣告を出して、カタログ及料金表のやうなものを先方に送つて注文を取る。

アドライターはこの點を十分考慮し相手の商店といふものを深く研究調査して餘りヒドイことをせぬやうにやるがよろしい、一度で高い文案料に愛想をつかさされるよりは、安い文案料で二度も三度も引續いて依頼をうけた方が職業的生命を延長しアドライターとしての信用を増すことになるのである。

廣告文案圖案の如き特殊の職業を他に紹介するには、廣告の效果及實行に關する説明を要する

—専門的の知識を要する。

相手に對して徹底的に廣告の效果を是認せしめるまで努力せねばならぬ。然し説明的技術よりも寧ろ眞剣なる努力に依つて、注文者の心を動かす必要がある。

この商店は果して、廣告を必要とするか否かを調査する前に、その商店の組織方經營方に就いて詳細な研究を必要とする。

- 一、この土地に於て第一流の商店か否か
- 一、店主の經營方針及廣告に對する態度理解の有無

一、店員の思想雇員の人數

一、顧客の數員

一、現金賣上高掛賣上高

一、ウキンドウに現はれたる店の風

さつと右の觀察から、廣告としてはドンナ風のものが好きかを研究するのである最も正しい考から邪念妄想を拂つて考へなければならぬ。

唯、廣告文案さへかけばいゝといふ主義でやつては失敗する。見込がない、あくまでも商店に對する同情と理解とを以つてやらなければならぬ。

この書店にはどうしても、廣告が必要である。新聞か雑誌かチラシかカタログかと精密に調べ上げた上でいよく交渉を開始するのである。

恰も、ドクトルが患者に對して、聴診器をとり、脈を見て、その病狀を診察するが如き態度を以つてヤルのである。先づソコの店員と無類の仲よしとなる、程度まで接近して行く。店員について、ヨリ以上深刻に病院の探究に力を注ぐのである販賣政策の實際から廣告政策の實際に及び

殆んど餘すところなきに至るまで研究調査を遂げるのである。

ソコで主人と相對して、自分の診斷に依つていろいろの改良案を樹てやる、勿論正面からキリ込むといふのでなく、極めて婉曲に、音なしく出るのである。

現金販賣に對する主人の意見や掛賣に對する主人の經驗について、詳細に聞きとるのである。そして、廣告をやつて失敗したことがあつたか廣告に依つて成功したことがなかつたかと、追窮するのである。

而して、主人の廣告に對する態度を知るのである。その間少くとも、廣告上に不審の點があつたとすれば、容赦なく廣告のやり方について説きつけるのである。

コレには一々實例を示してとかなければならぬ。賣上を増進する唯一の手段は、廣告の活用利用に俟つ外にないことを極力高調するのである。

口先き丈で唯巧いことをいふのでなく眞實自分の誠意——精神のあり丈を披瀝して、相手に對して奉仕の實をあけるのである。唯感情の上から廣告の効用を説くばかりでなく、實際を例證と

して、廣告の必要を親切に説く「成程そんなヤリ方で廣告をやれば成功する……」と確認せしむるまでに誠心誠意を以て納得せしめるのである。さうして、廣告文案の原稿立案を引うけたとしても、あくまで満足するまでに立派な原稿を作成する。氣に入らぬときは何度もくり返してやり直すのである。

一度引うけて、いゝかげんのをこしらへあけて、あとは野となれ山となれといふやうな淺墓な考へではいけない。例へば一枚のチラシを拵へ上げて料金をうけ取つてからも高尙親切の限りをつくして十分利用し十分満足し得るやうに力めなければならぬ。

廣告を一度引うけてからあとは只の一度も顔を出さぬといふやうな薄情ではいけない。

何時までも、自分の得意として、時折訪問し廣告のキキメ賣上の多寡に聞いて意見を徴するがよろしい。

廣告の十の効果を五の效果までしかあけて居らぬときなどは、更に説明を繰り返して十の効果をあけるやうに努力せねばならぬ。

手段としては、唯事實を基礎として根強く突貫するのみである。秘訣は事實の明證に存するの

である。

つまり事實をスタートとして進むのである。現實の事實に徴して、十分な光を發揮するといふことにせねばならぬ。

執拗や巧辯を頼み込まうとしても全然ダメと思はなければならぬ。

これのみは怠けてゐるは面的本成績を現はすのである。

株式相場のやうに一時的變動に依て儲けたり損したりするのところがつて働けば働いた丈の能率が現はれて来るのである。

例へば朝の七時から午前十一時頃まで眞剣に努力すれば、努力に準じてその効果を見出すことが出来るであらう。

丁度仕事の比例は物理学の原則と同じ理窟で、百回の交渉は五十回の交渉に比して、遙かに効果をあげ得るのである。午前中一つでも二つでもひきうけた広告は午後か夜間か——比較的氣分のいいとき着手する。

尤も期間を何時間までと決してあるものはツレまでに出来上ればいゝのである。

本月中に於て百回の努力を連続したものととして、本月中に百回分纏つた努力の効果が表面に現はれて来なくも来月から来々月中には何等かの形式を備へて現はれて来ることは事實である。

言はば今日の努力は明日の實を結ぶ芽となる——この堅實な方針を以つて進むことが最も肝要である。

一時に多くの仕事を引うけやうとアセツて見たところで巧いことを喋舌つて見たところで、その理想を實現することは六づかしい。

廣告を作成してからも再三訪問して、廣告に不備の點がなかつたか或は廣告の上に支障がなかつたかといふ細かい點にまで注意してヤルことは前述の通りである。

それは、丁度娘を嫁にやつた親が、娘が姑に對し、聲に對して不都合なことがないか或は何かの落度がないかといふ風に注意するのと同である。

そして一度廣告の仕事を引うけた以上は、その商店と親善な關係を結び親類交際を續けて經營上、廣告上の實際顧問となつてやるのである。主人の諒解さへ完全に得れば月に五六度顔を出して廣告販賣に關する自己の意見を開陳して月額一定の顧問料を貰ふやうにしてもいゝのである。

例へば、廣告以外の仕事——店舗の改善、装飾の方法といふ風に世話を焼いて、月にイクラかづ、纏つた顧問料をうけることにすればいいのである。

かうした誠心誠意は、店主に通じ支配人に通じて店主支配人の援助と裏書とに依つて別の商店から新しく廣告の仕事を引うけることの出来るチャンスをつかむことが出来るのである。

自分一人の力を頼むよりは多数の人の力をかりて仕事をひろげて行く方が樂であり且つ各方面に對して廣告の仕事を展開させることが出来るのである。

一生懸命、努力すればソレ仕事に効果が上るのであるから根氣と親切で、仕事をひきうけること以外何の秘訣もないのである。

一年でも二年でも三年でも持久の戦ひをつゞける。廣告を利用せよ！廣告を利用せざる商店の不便不利を言説して耳傾けるまで最後の努力をこらみるのである。

八月遅れの雑誌販賣

發行者の意志は那邊にあるか、其真相は解らないが、近來雑誌の發行者が競ふて、九月の雑誌を八月中旬に出し、

十月の雑誌を九月の半ばに發行する様になつた爲め、

正月號が十一月末から、十二月初旬に出ると云ふ一種不可解な奇現象を呈してゐる。

従つて、九月の雑誌を九月に、十月の雑誌を十月になつてから購讀すれば、詰り古雑誌を購讀した様な感じがする。けれ共何事にも儉約主義を處世の大道と心得てゐられる人々は、

恚した現象に一向無頓着であるから、矢張り九月の雑誌を九月に購讀し、

十月の雑誌を十月に購讀して盛んにサンジカリズムやデモクラシー、乃至は勞働と賃金など時事問題に驚異の眼を見張つてゐる。

恚した一月早く出す雑誌を利用して生れた職業は即ち月おくれの新しい雑誌の販賣屋で、

此の月おくれの新雑誌屋は詰り、
九月の雑誌を九月になつてから賣り、
十月の雑誌を十月に、

お正月の雑誌をお正月に賣る、
主義の雑誌屋であるから、理論上から言へば何にも月おくれの雑誌屋ではないが、前述の通り
雑誌の發行者が、一月宛先きに發行して行くから、恣んな變體の營業が出たのである。

さて月おくれの新雑誌屋の誕生は以上の通りであるが、何故この營業は儲かるかと云ふに、前
にも述べた通り、九月の雑誌を九月に賣り、十月の雑誌を十月に賣るのは詰り一ヶ月遅れの古雜
誌であるから、出版業者間の規約に依つて殆ど定價の五分の一位に買入れる事が出来るから、之
れを定價通りに賣れば原價五倍の利益がある。

即ち月おくれの雑誌を壹百圓だけ買入れ、之れを定價販賣すれば五百圓となる。
今壹百圓を以て月おくれ雑誌業を開始し、一ヶ年間に何程の利益あるかを見るに、
第一年 資金 壹百圓

- 第一月末 金五百圓
- 第二月末 金貳千五百圓
- 第三月末 金壹萬貳千五百圓
- 第四月末 金六萬貳千五百圓

となるではないか。併し之れは月おくれの新しい雑誌中でも、比較的堅實な

- 主婦の友
- 農業の世界
- 映畫の友
- 講談雑誌
- 日本の出版
- 新青年
- 實業の日本

等云ふ一流所の雑誌を云つたのであるが

其他の文學雜誌、講談物、政治雜誌、子供雜誌等に到つては一ヶ月も遅れると、

一貫目参拾錢位で買入れる事が能きから壹百五拾圓を出せば五百貫目を買入れる事が能き之れを一貫目壹圓五拾錢に販賣すると假定せば、矢張り其利益は前の場合と同じ様に五倍であるから、之れ亦た其利益は莫大なものである。

然るに此種の雑誌を販賣するに付き特に注意すべき事は、一貫目の古雑誌は、其種類の如何を問はず、

其冊数は凡そ二十冊乃至三十冊であるから一冊七錢五厘で販賣しても二十冊ある場合には一貫目が壹圓五十錢となり、三十冊ある場合には一冊六錢で販賣するものと假定すれば一貫目の雑誌は壹圓八拾錢となるのであるから其利益は更に増大してくる。

一ヶ月遅れて雑誌を讀んだからとて、

何にも夫れは恥辱ではない。

新しい事柄を知るには新聞と云ふものがあれば、何にも雑誌のみに依頼る必要はない筈であるが、其處が虚榮で、新しい事を一分でも早やく知るのを名譽としてゐるから、新しい雑誌は賣れ

るのである。

併し夫れは或る一部のハイカラ黨、ニキビ黨であるから、月おくれ雑誌の賣行には些の故障は起らない。

所が假之月遅れの雑誌でも、五分一値段で買入れる事の出来ない雑誌がある。夫れは如何なる種類の雑誌であるかと云ふに、美術雑誌である。

美術雑誌は古くなつても、一向に値が下落せず、

下落した所で、二割か三割であるから、詰り古雑誌でも、一圓のものは古物で七十錢位し、到底之れから相當の利益を賣る事は至難である。

従つて月おくれの雑誌販賣業を開始する場合には、其目錄の中から美術雑誌の誌名は除かなければならないのである。

さて以上述べた所の月おくれ雑誌業を開始するに當り、この月おくれ雑誌を如何にして買入れるかと云ふに、

この買入方に二種の遣方があつて、其遣方の如何に依つて、損もし、莫大な巨利を博する事が